女學雜誌

第二百二十四號目次

社説　論説　批評　雜録　小説　寄書　時事

細君内助の辨

女子教育の私見を述て巌本兄に寄す（寺尾熊三）

春江文章○明治學院に對する記事

○閨后の囁き（末松謙澄）

慈善問答○女子文學者○カウパーの詩○小松崎古登女を訪ふ○深夜の星○口に毒ある人○濟めぬ庭うき世

華族女學校卒業式に於ける、學監下田歌子女史の演説○思ふまゝ新らしき集會及政社法○是れ政談乎○研究せんとを欲す○猶ほ流水の如し○博覽會場女人禁制の場所○子守堂若衆倶樂部○結婚媒妁所統計○冊間忙々○何處に同志者ある○此頃の新聞紙○雜報の造り手○ギウッキ女史○ピアノ及びヲルガン○禁酒上運動○フホーセット女史の名譽○卒業女學生○婦人矯風會○佛和女學校○看病婦學校○女學校と師範學校女子部○吉祥女學校○長濱婦人會○萬國矯風大會○ステッド氏の懸賞○レピット夫人○廢娼記事○通信○週報

Let no one say, the children will not understand it, for thereby he deprives them of their greatest good.—Fruebel.

通信女學

講義錄第一第二第三卷皆再版第七卷出版

通信女學は學校に通はれぬ婦人が家に居て獨學する樣當今の女が心得べき學問を悉く講義し、一日四枚宛讀む時は家政、育兒、看病、衛生、生理、漢學、和學、英學、歌、作文、算術、動植、理化學、万國及日本の歷史、並に地理等を壹年にて卒業し女學雜誌社の卒業證書を受くる規則なり講義錄の文章は分り易く一々假名を附け且繪を入れ尚不明瞭の所は質問に答へ專ら信切を旨とし學校にて直ちに敎授を受くる思あらしむ毎月々謝卅二錢拂込の人には二百枚餘の講義を送る、目下既に第七卷を出版したれども、今月新たに入學する者は其第一卷より順次に稽古するも可なり

一冊代卅二錢（無郵稅）半年前金一圓八十錢、一ヶ年前金三圓五十錢

女學雜誌購讀の人は一割を減ず

東京富士見町二丁目一番地

女學雜誌社

八月二日發兌　第二百廿四號　一冊定價六錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 224. August, 2nd. 1890.

EDITORIAL :—Wife, a Helpmate.

LEADING ARTICLES :—A Word in regard to Woman's Education. (Mr. Terawo.)

CRITICAL NOTES:—"Shunkō Bunshō" Comments on the "Meiji Gakuin" Whispers Heard in the Private Chamber.

MISCELLANEOUS :—A Talk on Philanthropy. Female Writers. Cowper's Poetry. An Interview with Mrs. Komatsuzaki. Midnight Stars. The Mouth of Poison. Humourous.

NOVEL :—"Ukiyo."

OPEN LETTERS.

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

第二百二十三號目次

社説　事業論○詩歌（万葉集、宗教心なし、貴族的、優閑、長歌具からず、歌の佛性、歌の未來）

論説　在布哇受洗始末（安藤太郎）

批評　正行論○吉野静○江戸むらさき○國本○愛民公論○天則○作者佯人○新体詩権○冷風一掃

雑録　静女数主平尾みつ子を訪ふ○扶摩某の数へ○鉢を洗ふ事○倫理問答○横散文學○ミルトン傑作の生ろ所以○知事の細君に貧民の食を嘗しむ○食物と温度○きよめの底

小説　うき世

寄書　世の貴婦人に訴ふ（万春野史）

時事　海外國の女學校○横川退助君○日月と天秤○福澤翁故新島嚢君の賢さに謝す○學生及世界○財務こゝより亂雑せん○井深梶之助君

通信　鳥取市女報

女報　但馬、西京、静岡、鳥取の女報○神戸英和女學校洋行生○天竺の寡婦○支那の赤兒殺○別のタメ○細述の女醫○マメイ益々盛んなり

Women in Japan.

THE MEMORIAL TRAINING SCHOOL

for

NURSES IN TOKYO

was instituted in Nov. 1886, as a memorial for a lady who had so earnestly worked both here and abroad for the cause of "suffering humanity." The contribution toward the object of training Christian nurses amounted to 3000 yen, and a class of 8 women began their first years' work. Arrangements were made toward the close of the first year by which the class could carry on their training on a practical line at the large hospital connected with the Imperial University. These women are all usefully employed and great blessings have attended their work. A second class, after a year of study, entered this year.

But it is very desirable that these nurses should have a kind of training which cannot be secured in a large hospital. It has long been thought that a house in which the comforts of a Christian home could be found and in which a few invalid ladies could be cared for, would be a great blessing to many in the land $3000 in addition to the 800 now in hand will be enough to build a sanelarium on 2 acres of ground which has been purchased in a suburb of Tokyo. The following is a board of managers.

Mrs. Wistar Morris,	*Phil. Pa.*
„ A. C. Reed,	*Cal.*
„ David Thompson,	*Tokyo.*
Miss E. P. Milliken	*„*
Mrs. K. Okami M. D.	*„*
„ K. Watase	*„*
„ M. Suzuki	*„*
„ N. Tamura	*„*
„ S. Taneda	*„*
„ M. T. True	*„*

A full report of this work is made in a little pamphlet just published and any of the above ladies would be ready to give information to inquirers on the subject. We hope that the noble work thus begun will find many sympathetic friends who will be willing to reach a helping hand.

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百二十四號
明治二十三年八月二日發兌

社說

細君內助の辨（上）

一。奴隷

シエルドン、アモス、其政治論中に云へらく、人を奴隷にするの惡僻古しへより有り、而して亦た何の時代にもありと。ハーバート、スペンサー、其「來るべき奴隷」の論に云へらく、古風の奴隷は畧ぼ跡を絶てり、然れども今后亦た一種の奴隷を生ぜんと。蓋し人に我慾無情の私しあらん限り、强き者は弱き者を壓して、之を利己の爲に使役せんと欲せざるは稀れなり、豈啻に羅馬希臘の世に於てのみ奴隷澤なりしとせんや、爾今万代到る處ろ之に類するもの多し。官員は謂ふらく、民は余輩の爲に使はるべきものありと、父は謂ふらく、子孫一族は己れが爲めに仕ふべきものなりと、如此くにして人層々たがひに其下に在るものを使役せんとす、彼等は上に在るもの、爲めに使はれて亦た下にあるものを使わんとす、人間互ひに器具となりて遂に靈性を尊重せず、滔々たる天下物ありて人なしと云ふべし、喩へば蒸氣關の一車他の一車を推し、他の一車更に他の一車を推すに似たり、我も彼も遂に一の器わとは爲り了らんとはするなり。コーレリッヂ泣きて歌ふて云はく、人を更へて物とす、世は久しからじと。然れども世は長しなへに此の慘劇を止めず。

昔し伊右衛門の廢家に怪物現ずと云ふ。大ひなる一つ目子僧先づ冷笑して嘲ける、之を擊てば忽然滅して石地像頑として立てり、暫くして皿目鼻を開らき叱して睨る、破るれば流水流れて混々死者の毒血に化す。其變幻出沒定まる所ろなしと云へども、要するに一の魔怪ありき、魔怪時に應じて樣々に現出す、姿たを同ふせずと云ふと雖ども、其人を犯さんとするに至りては一にてありき。奴隷使役の情は恰も魔怪に似たり、此の魔怪や白日に於ては白日の躰を取り、夜陰に於ては夜陰の躰を取る、現はるゝ所ろ異なると云へども、其の人を毒するや同じ。アリストートル云く、奴隷は重寶なる器械なり、人に役せられて文明の發達を助くと。支那の天子桀云く、民は朕が爲めに生くる者なりと、英のチャールス亦云く、民ありて君主あるに非ず、君主あるが故に民あるなりと。之より以下慾言層重として積む、最后に堂々として言ふものあり、云はく、

○妻は夫に仕ふべきものなりと、安んぞ是れ腐怪の姿を裝へて復た再び出現せるものにあらざらんや。

二　ホーム

近頃ろホームと云へる語は普通の如くなり行たり。數年前吾人が「日本の家族」數篇を公出し、初めて「ホーム」と云へる語ばを高く吹聽せしより、年月は此の微なる種を發育して、今や到る處ろに其聲反響せり。

又た、男尊女卑と云へる一語同じく大ひに行われ、今や女子を玩ぶ物の如くに持成すは極めて悪しきことと分かり、何如なる我儕の人にても、最早明らさまに是を公言することを得ざるに至れり。即はち女は男の道具なり、なぐさみ物なりと云ふことは、十年前に於ては男子の誇りて以て其勇を示せし所なりとは云ども、今の士君子はさすがに之を嫌へり、身何如に我慾多しと云ども、最早斯くの如く明言すること能わず。

於此乎、ホーム、スヰートホーム、（家庭、團欒せる好き家庭）と云へる言葉頻りに流行し、女子教育者も亦た之を口にして其教育の理想は然なりと云ふもの多し、之れ尤もの事にして無論悪しきことにあらず。但だ只だ吾人は、何如にして其の好家庭を造るかと云へることに付き、稍ほ世人と異見を有ち、兼てスヰート、ホームとは如何なるものなりやと云へる、其の現象の解釋につきて、亦た思ふ所ろを異にせり。

世人云く、妻は夫を慰さむべきものなりと、吾人も然りと云はん。世人亦云く、妻は夫を助くべきものなりと、吾人も然りと云はん。世人亦又云く、妻は能く家を治めホームを温ため其人の憂を霽らし之を新鮮にし快活にし而して之を奨勵すべき者なりと、吾人も亦然りと云はん。然れども世人が妻を呼んで、夫を助くべきものなり、慰さむべきものなり、勵ますべきものなりと云ふや、同時に妻は夫の爲めに呼息し、夫の爲めに生存し、夫の爲めに世に出でたりと云はんとするの語調あるに至りては、吾人は斷然之に逆らつて大異見を絶叫せずんばあらず。妻は夫に副ふて生存せり、然れども夫も亦た妻に副ふて生存せり、夫の妻なかる可らざるは、妻の其夫なかる可らざるに均し。妻の天職は夫の奴隷となるにはあらざる也。

吾人も亦た、妻は夫を助く、夫を慰さむ、夫を勵ますと思へり、啻に思ふのみならず、斯くあるべしと屢ば勸告することを常とす。然れども吾人が斯く言ふに當りては、毫末も妻は夫の爲めに世に生存すべきものと言ふことなし。眞とや、妻は夫を慰さ

む、然れども此は慰さめ手……即はち之に侍べり、之に愛嬌を呈し、宛から幇間持が客を慰さむるが如く、藝者が客の機嫌を取るが如く、こしもとが癇僻ある若殿に仕ふるが如く、卑屈官吏が落膽せる長官に愛想を申すが如き……慰め手にはあらず。妻は素と夫と共に一事業に働らくの人なり、即はち夫と共に其事業を分擔するの同業者なり。而して夫は男子の性として外に働らくが故に、妻は女の性として内に留まるとあるべし、既に外に働らく時は直接に其事業の爲めに俗世の苦難に觸れ、或は悲しみ、或は失望して家に歸るとあるべし、此時に於ては其事業の分擔者とし、女の優しき天性とし、同情同愛に切なるの夫婦として、必らずや之を慰さむるとあるべし、之れ自然の關係にして人情當に然あらざる可らず。妻は初めより慰さめ手として存するにあらず、夫と共に一事業を分擔するの同業者として存するなり、既に同業者にして多く家に留まる、其の外より歸るの良人を慰さむるは正に論なきの務めと云ふべき也。此に於てか、妻は素と同業者たる也、故を以て亦た夫の慰さめ手となる、既に慰さめ手となる、故を以て夫の助け手となる、既に之を助け之を慰さむ、故を以て之を内助奬勵するの賢夫人とはなる、然れども未だ初めより、慰さめ手、助け手、勵まし手として、夫の副產物とあらんが爲に生存するにはあらざる也。

此の理、些細の相違に似たり、左れど其の實際に現はるゝに及んでは、之が爲めに非常なる差別を生じ、妻を奴隷とするると妻を半身とするとの大懸隔を生ず。婦人世に存して生命なきの死物とし遇せらる、是れ女性の爲めに幾干の痛恨ぞ。然れども如此きは只だ女性の爲めの不幸のみに非ず、實は男性の不幸なり、人を役して器わとするものは身も亦た器わとなる、男性が女性を殺ろすは遂に男性の自殺するに均し。人類邦家の凶運之にまさるもの少なきを信ず、故に吾人は細かに此の理を陳辨せずんばある可らざる也。

三。朋友

ベーコン云へらく、朋友なきものは神にあらずんば野獸なりと、即はち人に非ざるを知るべし。人は朋友なくんばある可らず。朋友とは第二の吾にして亦た第二の人類なり、若し能く朋友を愛するとを得ば即はち人類を愛するとを得、亦た其自己の靈性を尊とむとを得べし。朋友なきものは多慾なり、無情なり、殘酷なり、且つ其の內性に陰險なる所ろあるべし、

公開しがたき處ろあるべし、即はち不正陰險にして只だ獨り抑鬱し他に現はすことを得ざる所ろのものあるべし。皆其れ人性至美の徳に非ず、朋友なきものは善人に非ざる也。

故に朋友と事を共にすれば、樂しみ倍し、悲しみ半ば減ず、たとひ其事失敗すとも、失敗を共にして終り迄で相ひ愉はることなくんば、仕事に損ありと云ふと云へども、徳性に於ては德に益あることを得たり。

故に世の中の進むに連れて、社交盛んなり、朋友を得るの途進まんとする也。亦世の中の進むに連れて、會社盛なり、朋友事を共にするの途進まんとする也。朋友の區域廣まるの時に人心益に進むの時なり、四海朋友となるの時は四海同胞となるの時なり、此に至らば天國なり。

四。　半　身

朋友中の朋友とは夫れ夫婦の謂ひか、夫婦は常に朋友なるべし、決して主從なる可らず。

世に父子の愛ありと云へども、父子久しく同もに存して同じき事を爲す能わず、世に姉妹兄弟の親しみありと云へども、兄弟姉妹久しく同もに住ひて同じき事を爲す能わず、若し夫れ普通の朋友と同居同住して同一の事業を爲さんとするに至りては、今の慾多き世界之を滿足に仕遂ふすべき望み殆んどなけん。たゞ／＼共に住ひ、共に存し、殆んど年を同ふする迄で共に生き存らへ、偕老の后ち穴を同ふして共に同時に死せんとするに至りては、實に夫婦の外になし、夫婦は朋友中の朋友なり。

さればこれを一身同體と云ふ。若し之を夫婦の二つに分ては各自其半ばを有く、即はち共に半身たる也。英語に妻を稱してマイ、ハーフ（わが半ば）と云ふ、マイ、ヘルプ（わが介け）とは云はず。彼等互ひに半身たり、故に相合して一の事を爲す、其の事業に對しては夫の之に働らくのみならず、妻も亦た之に働らく、夫の働らくが爲めに妻は助手にして之に從せらるゝにはあらず、彼等同もに之に從事し同列に立つて其事業を分擔する也。但だ夫れ夫は男子なるが故に外に出て、直接に之を爲し、妻は女性なるが故に大率ね内に居て之を爲す、其の働らきの直接と間接と見ゆると外に居て世に對するの主となると内に居て之が從となるの關係により、稱して妻は夫を助くると云ふ、之れ不可なるにあらず、然れども妻は初より夫を助くることを旨とするにあらず、先づ彼の同一事業の爲に働らくことを旨とする也、之に働らかんとするに

當りて即はち夫を助くるのみ、妻も夫と同もに其事業に直係直屬す。

此故に、眞の意味に於て之を辨ずれば、一事業に對し、妻が夫を助くるが如く、夫亦た妻を助くると云ふべし、即はち半身相助けて共に一體の事業を爲す也。

ジョーヂ、エリチット（クロッス夫人）小説を著はす、良人クロッス之を助くると一と方ならず、新著出る毎に世上の批評霰の降るが如し、クロッス一々之を讀み、之を集め、妻の爲に助言す。　パットレル夫人（英國廢娼論の主唱者今尚ほ在り）二十餘年間社會淸德の事に盡力す、良人カノンパットレル之を助くると之に仕ふるに似たり、世上多くパットレル氏の名を聞かず而してジョセフヒン、パットレル夫人の名万國に轟ろくに至る。　エンマ、ウイラード夫人米國に於て女子敎育の主唱率先者とある、メレイ、ライチン女史未だマウント、ホリヨークの女大學を起さず、他の幾多の米國女大學未だ兆を發せず、此時に當りて先づ女子敎育を宣言したるものは實にウイラード夫人なり、而して良人、ドクトル、ジョン、ウイラード氏は、遂に其營業を廢して妻の事業、即はち女子敎育の事に全心を献げて助力するに至れり。　ジョン、スチウワート、ミル、其の夫人の内助を蒙むると尋常ならず、然れども亦た其の夫人を助くるとも世の常ならず、其の「自由論」は夫人を紀念せんが爲め也、其「女子服從論」は夫人の意見を主張せんが爲め也、其の國會に建議せる所ろは夫人の女權伸張案を實行せんが爲め也。　夫れ、良人にして其夫人を助くるもの古來尠しとせず、之れ夫人が其良人を助くると一樣のとにして共に美事に屬す、然れども其相助くるに於ては兩者に優劣前后の差あるとなき也。　在るを良人が妻を助ると云ば之にアハレミの情を含ませ、妻が良人を助くると云ば之に仕ふるの意を含ますは抑そも僻見に非ずして何ぞ。妻の良人を助くるは猶良人が妻を助くるが如し、半心互に助けて一體となる、左右安んぞ上下主從あらんや。　たゞ妻を呼んで助け手とし、慰め手とするものは、女性の質温柔にして且内に居し、働らく所ろ表に現はれずして大率ね外にあるものゝ中に沒入するがゆへなり。　フヒリップ、シドチー云く。和樂せる一體、樂しきかな伉儷、彼は彼女に於て喜び、彼女は彼女に於て喜こぶ、彼女が彼女に於て喜こぶとは彼女が能く彼を喜ばせたるとを喜こぶが故あり。　二人互に相與へて其富を增し、其生涯を倍にしたり、其生涯を倍にすと

は二つの生涯を合して一となしたるが故なり。其家には、欠くる所あるなく、滿足を不十分にするとなく、滿足して厭くとなし。彼が支配するは支配するにあらず、彼女が從はんとを好むが故なり、彼女が從ふは從ふて其中ち彼を支配しつゝあるなり。

夫婦一體安んぞ優劣あらん、但だ剛柔陰陽の性に隨ふて異名を附す、自ら使ふと思ふものは實は使はるゝ人なり、主人には實は召使へたる也。

論説

女子教育の私見を述べて巖本兄に寄す

寺尾隆三

農學士なる岡山中川氏は[illegible]出陣せんとす時に於一文を寄して女學雜誌上に於ける讀者及、評議に[illegible]、なほ關係あるもの[illegible]也、本誌一箇月二回[illegible]、然るにこゝにさらに[illegible] 女學雜誌記者

天籟然として曲を作し帶々するゝ其淡雅なるを知らず婉娩撓て幽々の谷にあり颯々たる涼風を送り清流く漲つて鏘々たると水の轉るが如し靜さに銀河の大雨來らんとす遙かにして黑雲片々散じて深大洪ふが如く日輪頭上に赫灼たり炎威念々加はつて汗を流し金を爍す是はこれ夏間屢々見る天氣の常態なり。

日暮風微かに涼氣池塘に生じ若薪陰濃かにして垂柳絲滴らんとす、一蛙呼應すれば遠邇那邊忽ちに相應和し閣々として白雷轟き大山崩壞す此時に當つて人其傍を潜行すると雖も萬蛙嚴嚴に驚いて鳴を息む寂然として地籟休す是はこれ當時城外の晩景に非ずや。

余は一夕澁谷の里に宿す蠻般世事の煩線を脱れて此境遇に逍遙し始めた世道の變遷興廢の偏駁するを見て心感ふる所あり聊か所感を臚陳して君の机下に寄すると云ふ。

方今神洲の事大となく小となく新規校に出でずんば殆んど全く舊物を變改したる者ならざるはなし是れ其歐米と文明の軌を同ふし同進の步調を以て驅馳せんとするに本づく、彼の欧日と云ひ世界と云ひ皆時世の已むを得ざるに出づるなり余は其時勢に利ある限りは幾何一時に興起するも患へざるなり之れ唯恐ろ其を狀捨擲して多年の後に發功の良果を擧げんとを希ふ然るに企圖遠大にして始は隆盛なる事業と雖も往々中途にして頓挫するものあり或は幸にして永續するも漸々非微して終に其骸骨のみを殘すに至るものあり歎ずるに堪ゆ可んや陰々たる雲雨を催ふせども須臾にして四散し天日輝いて民望

逢ふ蛙聲雷の如くなれども人の來るを聞かば一齊に粛息して四隣寂々たり當今女學の景況亦將さに斯の如きものあらんとす。

女子教育は人事の至要なるものなり是ありて國盛へ是なくして國衰ふ世人業已に之を知れり故に彼等は嘗て女學舍設立に熱中せり雜誌に演舌に狂奔せり有志者貨財を投じ當職のもの女子教育を以て萬事に先立たしめんとせり。嗚呼幸なる時運多望なる民情余は誠に欣喜跳躍せしなり。

春去り秋過ぎて玆に明治廿三年の別天地を開く民情遷移して又昔日の如くならず彼等の熱心は今方角を轉じて他界を襲撃しつゝあり。輕剽なる民情爾ち奚爲ぞ斯の如く女學を冷却するの甚だしき彼對へて曰く、

女子教育の必要なるとは今も猶ほ昔日と異ならず然れども其の一意投身する能はざるものは當時の教育法其當を得ざるが故に之が爲に力を竭すも當底無益なるを信ずればなり見よ女學校出身の婦女は辯口に巧みにして行に鈍きに非ずや多くは舅姑と諍をなし良人に順はざるにあらずや輕躁にして遊戯を好み無禮にして市街を横行す斯の如くんば家政は亂脈なり兒童の教育は失敗なり反つて從來の教育——無教育の優れるに如かざるなりと。

噫嘻是れ何等の早計謬見ぞ。筆を取つて涙先づ下る然り余れ言はんとす。彼等が利口輕擧なるは智嚢膨大せるが故のみ活潑なるが故のみ舅姑と諍論し良人に屈せざるは自由の活氣に煽動さるゝが故のみ凡そ眞正の教育は人をして牛馬の惰性獣從を免れしめ獨立活歩の氣を養ふ見ずや西敎の眞理はルーテルを生み又クロムウエルを出せるとを世の所謂革命激亂は皆此元氣を含蓄せざるはなし而して結局最善の美菓を擧げたるのみ近くば例を本邦男子の教育に採りても同種の弊害なるものに遭遇せしとあり余は猶ほ記臆せり一時道路に異様の怪物顯出せるとを彼れ身には短衣を絡ひ足に高屐を穿ち兩肩山を聳かし風を切つて行く口にリードルの片言を挾み又好んで衣到腕を誦す人呼んで生意氣と云ひ背へて事を謀るに足らずとせり而して將來日本の運動は一に這輩の手に落ちんとす否現在に於ても彼等の關渉する事業は甚だ多しとす當今女學生の位置實に爰にあり自然の勢ひ免る能はざるなり。

余は彼等の輕行暴擧多端なるを觀て悦ばず然れども彼等は未だ完全の教育を受けざるなり其完璧を作りて未だ上塗をせざるなり玉若し研かば千里も照すべく馬若し馴致せば千里も行

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

くべし於に余は女子慢性の弊根を治癒せんことを欲し併せて從來の教育法に徳育の足らざる所を補はんことを願ふ斯の如くにすれど將ほ彼等は世人の嘲謗攻撃を免れざるべしされど其輕佻なるは行爲活潑なるが故のみ舅姑と爭ひ良人と論ずるは權意の自由を與へ護らんとすればなりと難なるも亦茲に出づ爰ぞ治を收しめ細に察することを須ひん。

夫れ女子の教育は徒らに天賦の隨性を嘆き歐米不倫美を托驗に貯はへ稱を秩に寄せしむる所以にあらず。又徒に百語らかに吹を出て擬手巧みに時代を存し標へ長則を觀し新踏舞會に婦節を抄り交際場裡の花形たらしめんとの所以に非ず。又孤燈寂寥の下に獨居して古今百家の書に涉獵すると雖も肉落ち骨出で顏色憔悴たる女博士を出すの所以に非ず。而とに無稽健全にして生氣溢れ學一般普通の事に及び品構深かに妄想深く理想高くして氣節固く家を修めて秩序あり兒を鞠ふて婉順なる女子を出すの所以なり　斯の如くんば余が所謂女子教育の目的に錯誤からんか。

吾邦の歐米列國に及ばざる謙し衣食家屋彼に倣ひ殖産工業彼に從ひ文學宗教亦彼に法とる凡そ文明の具一として彼に仰がざるはあし茲に於てか皮相外相的の文明紛然として備はる。誰か銀座の街頭に立ち楊柳綠依々たるの所電氣燈光り晢烱たるの下高樓大厦の鱗次するを觀ば飄然羽化して巴里城裡に游ぶを憶はざるものあらんや誰か横濱埠頭に立ち大艦巨舶の泊する所檣竿林立旗章翩々空に舞ふを觀ばフィリップの海軍英吉利斯艦隊に彷集せるを想はざるものあらんや故ある哉洋人余等を目して摸倣的の人種なりと讒誣言に非るあり。

花は莖根あつて榮へ美人は腸胃あつて勃發し國は實力元氣あつて振ふ由より企業のもの國を治むるもの皆然かく思へり余は國の盛衰を百擴く宇内の大勢を察するに及んで未だ嘗て之を回想せざるはなし。方今天下を睥睨し四海に威臨する歐洲列國は實力を貯へ元氣を養ふに方て盈を虛とし有を無とし苦く孜々勉として今日あるを得たるなり其間千辛万苦は幾何ぞ。器具發明の爲め財を棄て身を喪ふしたるものありポットゲル之なり、機械發明の爲め窮阨死に瀕したるものありアークライト之なり、猛獸毒蛇の住む所を跋渉して力を布教傳道の爲又地方探索の爲に拗して終に斃れたる者あり――ピンクストン之なり、身を捐て學問に委ね大に發明する所ありと雖も人の嫉忌に逢ひ空しく囹圄に呻吟せし者ありガ――レヲ之あり自由獨立の爲に身を犧牲にしたる者擧げて數ふべからず佛蘭西

英吉利獨乙伊太利亞米利加に義人烈士多し彼等死するも幸にして仍ほ國運を開くを得たり波蘭土の如きは悲慘極まる愛國の士肉を裂き血を流し骨を砂礫に暴すと雖も畢に强敵の亂擘分取する所となる不幸之より甚しきはなし夫れ列國は積年此の如き困苦を甞めて漸やく今日の文明を效す豈偶然にして得たるものならんや。

余は竊く吾邦人に此經驗あきとを信ず器具機械の便利あるもの自己の作意より出でずして用ゆるもの多し技藝の妙文學の華必ずしも本邦の特產なりとせず自由の惠み憲法の恩賜邦人多くは其何物たるを知らざるに享けたり然らば則ち國に經驗なきや必せり實力元氣なきも天理の定數あり實力元氣なくして振はんと欲するは花の莖根なくして榮へ美人の腸胃あくして顰笑せんと欲するに均し。國人擧つて此に反省せずんば嗚呼又殆ふし。然らば則ち何如して可ならん。

敎育は間接に國を富まし直接に國の元氣を振起す余は女子敎育に於て殊に直接間接に國の元氣を振與するを知る完全なる女子敎育は獨立自由の精神を授く夫死するも以て自から生營すべく子生まるれば之に忠義愛國の念を燻濡す忠義愛國の念は凝結して國の元氣となる余は人の之を嗤評して無益の長計となすも敢て意に介せず蓋し國の基本を立つるに此氣の最要なるを信ずればなり。是氣や尋常の中に寓して天地の間に塞がる卒然として之に遇へば、英魯も其勇を失し支那も其富を失す是れ孰か之をして然らしむる哉其必らず形に依つて立たず力を恃んで行はず生を待て存せず死に隨ふて亡びざるものあらん矣。國家若し此氣あらば盤石の上に立つ如し激雨灑げども崩れず怒濤衝けども動かず碎けず列國と文明の馳塲を馳驅して常に捷を制す四海の內八表の外畏竦する所なし將さに日月も光りを失はんとす夫れ斯の如くんば國始めて安し。

巖本兄、足下は實に忠實愛國の士也社會の大勢を看破して女子敎育の必要を感じ敢へて名聲を當時に覓めず榮を天に享くるに滿足し假面的の國利をこれ勞めず大計を未來に期す神洲多く出さゞるの士なり其始め學に志ざすや吸々孜々夜日に繼ぎ以て今日の人と爲りを養へり國家の爲に大慶事たり。足下は溫厚多哀の人なり故なくして加ふれども怒らず意あくして許すれども怨まず塲然として君子の風あり人と與に笑ひ又與に哭く方今神洲の女性如斯きの敎育家を待つと大旱の雲霓を望むが如し彼等は累世歷制主義の家庭敎育に由り眞貧の美德天賦の自由を蹂躪せられたり之を養育し保護するは方さに足

下が任なり天職あり余は謹んで足下が着々之に當らんとを望む。時孟夏の候炎威日に加はる足下請ふ女子教育の爲否國家の爲に自愛せよ。

批評

97 春江文章

伊勢國安濃郡津釜屋町二十二番地鈴木嘉兵衛出版

花園女史近ごろ春江女史の事を談じ、且つ其の文集一卷を送らる。展きて讀むに燦然たる美本にして記事、論辨、序書の文各その體を備え、終始に諸大家の序跋を附す。伊勢の人龜井清灑氏云く、春江年甫十五、工書畫、近問文法於余未出一歳所作之多積至數十篇、と。矢土錦山氏云く、本朝以武建國、士夫相率講武、乃修文之業不得不付諸女流、今讀女史之文、文氣藹勃宛如春蠶吐絲、今後更積紡經績史之功則未必使紫赤二媛專美于前邪と。藤澤南岳氏云く、前日得岸田湘煙、今而得女史、女史亦如有所謂天賦者、問其年則十有五、而文之老蒼如此、且善書與畫、其才實天哉と。激賞至たらざる所ろあし。

余れ之を讀むに、措辭必らずしも大誤なく、文法頗ぶる宜しきを得、而して意想輕薄ならず、間ま美術者の天才を現じて所々に精細優温なる觀察を表し、麗にして雅、甚はだ女文の體を得たり。

遊二月瀨一記に云く、

此日曇雲浮々焉起、諸峰悉沒、或露其巓如仙島湧出海中、或僅顯本末者、如萍梗之撲生天池。

寄阿姉雪江君書に云く、

偶會秋風之起、悵然思阿姉、知阿姉亦思妹也、戀々之情曷已、客春太母君自浪越來于此地、而拜太廟、或游覽名勝、語予曰、雪江即在、應相携行也、之爲憾耳。

源賴朝論に云く、

如賴朝者至後世而唯秀吉以爲友耳、英雄之才各有所長、或有謀臣之才、或有戰將之才、或有霸王之才、賴朝之所長者夫霸王之才也哉、抱霸王之才而不能長傳於子孫者、酷肖秀吉、故秀吉撫其像背以爲友。

甚だ老蒼なるものあり、甚はだ眞實なるものあり、甚はだ可愛らしきものあり、以上三節を其の標例となす。

序によりて考ふるに、此等の文明治乙酉の年に成ると、乙酉は十八年にして今を去る五年、當日の春江若十五なりしとせ

は、今は即はち二十歳たるなり。十五にして既に此の錦繡文字あり、今果して何如ん、坐ろに慕はしく思はる。

花圃女史語りて云へらく、春江其后麻布東洋英和女學校に入りて英學を學び亦た基督教を信ず、后ち高等女學校に入りて妾と同時に業を卒ゆ、意氣甚はだ慷慨にして平素頗ぶる溫優、日夜黽勉して止まず、此頃ろ切りに畫に執學すと。思はざりき、女史は余が明治女學校に於て敎授する所ろの安井靜江子の姉ならんとは、靜江子眉目淸秀一見して才氣の秀でたるを覺ゆ、日常學びて倦まず靜にして能く問ふ極めて望みあるの學生なり、余れ未だ春江女史を見ずと云へども推して之を察し、其風采を憶ふ。聞く嚴父すでに逝き、姉妹相約して大に家道を興さんとすと、余は眞實に其淸望の成就せんヿを祈るもの也。

明治學院に對する記事

女學雜誌第二百十九號時事欄內、明治學院と題する五行の短文は、甚はだしく當路の人を激せしと見え、爾來之が爲めの批評を聞くと少しとせず。福音月報の第六號には、田村直臣氏の「明治學院に對する女學雜誌記者の意見に驚ろく」と云へる、六十二行一千六百餘字の長罵文を揭げ、女學雜誌記者を以て、大膽なり、無禮なり、暴言を吐くものなりとし、明治學院必らずしも同志社の如くならざる可らずと云ふは女學雜誌は閨秀新誌の如くあらざる可らずと云に均し、又押川方義氏なくんば明治學院に望みなしと云ふは、明治女學校に今の校長なくんば望みなしと云ふに同じとし、末段少さか押川氏の人物に付き多少の冷評を遺せり。

福音週報は蓋し此末段の評に激するものと見へたり、其の第二十號に「女學雜誌と福音月報」と題し、女學雜誌記者が、明治學院を以て同志社に比し、院の卒業生を社の卒業生に比し、前なるは后に及ばざるが如く言做したるは未だ直ちに然りと斷言する能はず、然れども押川氏の如き人物を擧て明治學院に入らしむるヿの至極必要あるは具眼者の等しく認むる所ろならん、記者は深く其必要を感じ忠實に院の前途を憂ひしものならん是れ余輩の固く信ずる所ろ也、然れども記者の文を讀みて憤懣し罵詈し惡口し押川氏を當今の傑士と稱したりとて之を怒り餘り見事ならざる心胸を吐出して忌み憚かる所ろなき福音月報記者の如きは、反つて明治學院の體面を害ふものにあらざるなき乎」と云へり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

同號に明治學院内の人、北窓生の寄書を載す、餘り女學雜誌記者を責め過したるものにして、一讀面はゆき心地す。吾人は先づ福音月報記者の卒直なる評言を謝し、次に他の雨記者の深く恐朴を憫れみ玉へるの信切を謝す。要するに過失は共に改ためたく、善事は相勵まして行ない度ものあり、明治學院の改良進歩如何あらんかを掛念せば足れり、掛念は奮發を生ず。

閨后の囁き

本誌第二百二十二號の時事「閨后の囁」は、國民新聞の記事に據り、世の賢夫人たらんものに勸告する所ろありし也、固より其人の何人たるを知る能はず、亦初めより人の何人たるに關はらざりしものなり。然るに末松謙澄氏より左の如き寄書あり、則はち掲げて一の批評文と爲すと云ふ。

拜啓貴社前號の紙上に登載有之候閨後之囁の一節は全く小生夫婦に關し其本は國民新聞の雜報より出候に相違無之と存候日刊新聞はまだしもに候得共苟も實直を旨とせられ且つ廣く世間特に女流社會の信用を有する定期刊行の貴社雜誌に於て右樣の記事を見受け候は甚だ奇怪と存候閨中の小事は他人の聞知する筈なきのみならず小生進退の義に付ては荊妻に於て口出し致候杯の事は決して無之處如何にも事實らしく御書立被成候は如何の譯に有之候哉全体婦女子と申すものは瑣細の事にも深く心痛致候は御承知の通に有之小生自身は假令如何ある惡口惜言を受け候共寸毫も厭不申候へ共男子の一身を論評する爲め無實の事迹を搆造して其妻孥に迄ゆる如き事可成御注意被成貴社平生の御主意に背ざる樣不勝希望先は右而已申上度早々如此に御座候也

七月廿五日　　末松謙澄

女學雜誌記者御中

雜錄

れぷた二ツ

若松賤子

過日さる女學校の窓下を通り計らず一節の談話を漏れ聞いたり、惟ふに半日改めてインタヴユウにまかりても尚得られぬ佳話なり、因て其まゝ書つゝけて土産にす。

甲。チヨイト新井さん今朝の先生の御話しよかつたことね、あのレプタ二ツの事……だからわたしたちはいくら少しだつて貧民救助に出せば好んですはネイ。

乙。ユイはんとうにあまり少し計りで何の益にも立まいと思つ

て、てんでにひかへればつまり貧民はいつまでも助からず、わたしたちも人の爲にする愉快が味はれませんは。

甲。だけれどわたしたちはこないだ編物した代も出したし、それから慈善會の切符も買つたから耻かしくはないのネ、レプタ二ッよりいくら多いか知れないは。

乙。アラ、樋口さんはあんなとおつしやるよ、今朝のお話しをどうお聞なすつたのでせう？あの寡婦は自分の身代で寄附の出來る丈はすつかり納めてしまつたからこそレプタ二ッでも大層お賞にあづかつたのじやありませんか？ソウ外にいくらも大金を投じた人があつても名譽かなんぞのために有餘る處から幾分か出したのだから何の功しもないといふ教訓でしたらう。

甲。でもいくらか出せば出さないより好いのじやなくつて？。

乙。それは好のでせうとも、あなたやあたしの出したのは何も名譽の爲といふじやなし、それをはなへ掛て人に誇るといふ譯でもないのですものを、ですがわたしはさつきから考へてゐましたよ……やつぱりだれでもレプタ二ッを義捐しさへすれば好のですがさて其レプタ二ッが人々でちがふのだろうとおもひ升よ、それでたとへ人が千圓出さうが万圓出さうがそれが出し得る丈より少なければレプタ二ッ出したのではなく半かけ丈出してあとは懐に納めて置く譯でせう、先わたしたちにして見れば一度慈善會へ十錢出したからつて安心してしまつて必要でもない花かんざしを十五錢で買ふとしませう、そうすれば二ッ出すべきレプタを吝んで半かけ丈しか出さない理屈じやなくつて？。

甲。アラ……そうね、そうするとわたしの樣にうつかり安心しちやいけないのね。

乙。ほんとうに安心すべき時でないのに安心するのが人間にとつて一ばんわるくあやういのです、ですから此間厚生舘での演説者が大へん激して、おつしやつたじやありませんか、一夜の宴會に消費する金の十分一の義捐金を良心の麻睡剤にしてゐる者が多くあるつて、そうして一度位は奮發して少し餘計のお金を投じたつて不段無責任にあればある丈つかい拂つてしまへば實に益にたちませんチイ、たとへは一日食を絶つて貧民に施したつてそれ切ならば却つて心に自得する丈其人の爲にわるいかと思升よ。

甲。そうするとお金持でも始終險約しなくつちやいけないのネ。

乙。そうですとも、儉約しなければ金持が金持になつてゐない理屈じや有ませんか、ソウデせうある丈つかへばあとはいつだつてなくつてよ。

甲。オホヽヽヽ尤も。

乙。チヨイトチアメリカで第二とさがらないウァンダビルトといふ豪商の細君は靴たびを自身につくろふのですと、ですから必竟慈善とか教育とかといふ大事の爲には幾千幾万といふ金が寄附が出來るんださうです。

甲。それでおもひだしたことがあり升よ、こないだ隣家さんが慈善會へ寄附がし度けれどお小遣は使つてしまつてないからいくらか前借つておつかさんにそういつておわけなすつたら返事が來てね、貧民を憐れむ心があるのは結構なことだから餘計にねだつて出さず自分の小遣から儉約してださなければなんにもならないつて、毎月の小遣丈送つておよこしなすつたつて隣家さんがブツ／＼いつて入らつしてよ。

乙。そう……あの方は實にお仕合せですよおつかさんのおしつけが好から………

此時俄かに室内にもの音して………。

女子文學者

香軒

物を見るに密なり、事に感じて情深し、女子の心配に陷り、悲愁に沈むもの多くは之が原因をなす、故に女子は常に心配なき地位に立ち、心を快爽ならしむるをつとむべし、殊に文學の道に入り、文壇に立つて男子と優劣を爭ふが如きは最も避くべき事なり、通常の人情として女子の著作を輕蔑し、頓着せず、斯る待遇に逢はゞ男子と雖も堪へ難かり、况してや感情鋭き女子にしてあゝか悲愁に沈まざるべき、曾て聞くエリザ、フイツスとなん云へる女子は幼き時より文學を好み、其著作も少なからぬとぞ、さるにいと心うき事多かりけりな、遂に失望解脫悲みて身の健康を傷れりし、若かりし時短篇の詩歌抔作りたりけるが世の人思はしく稱讃せず、此處に於て更に鋭意奮發して其著作を賣らんと決心せり、されど之を思はしく購ふ者なく書肆に至る毎に落膽して歸りけり、歸りて後も心配のあまり眠に就かず、深夜孤床にあつて夢熟せず、持たる身の不遇を嘆ちて明かせしぞ誠に憐れなりける、夫れより後或は政治上の事項を論辯し、或は翻譯に力を盡せしが得る所は只身躰の衰弱と失望のみ、思ふに是女子の天職を誤まりしに因る、後世の人鑒みて可なり。

クーパーの詩

みさを

活眼以て世を觀察するの人は曉星の如く稀なり、人心多くは波間に漂ふ浮草の如し、一非一是人の云ふ所に是從ふ、殊に文學上の著作に於て世人の見る所誠に賴みなし、昔クーパー詩を著はし、書肆に至つて其出板を求む、彼肆主に約して云へらく我草稿料を望むなし、友人に分たん爲め其數部を得ば、足れりと、肆主諾して梓にす、諸新聞諸雜誌之を稱讃せぬのみかは、種々の惡言もて之を卑しめたり、彼の詩集を買ふ人更になく、空しく書肆の店頭に横はりて塵芥に埋沒せり、彼亦第二集を著はし其親戚の書肆に托して公刊す、そが内に「ぜタスク」と題する傑作一篇あり批評者之を見て感服す、之を讃譽する事限りなく、遂に當代第一流の詩仙と推すに至れり、人始めて夢の覺めたるが如くクーパーの凡庸詩仙ならぬを悟りたり、先きの著作を見誤りしこそ愚かなれとて彼の詩を爭ひて讀みたりけり、之によりて先に梓にせしものも多く賣り捌けたりとぞ、先きの肆主は思はぬ幸福に遇ひて其業大ひに榮えしとなん、其後許多の書籍を發刊せしかども遂にクーパーの詩集程成功せしものはなかりしとぞ、文學上の世評古今概ね斯の如し。

小松崎古登女を訪ふ

生野ふみ

七月廿三日薙刀術を以て名ある小松崎古登女を芝西の久保巴町三十三番地の寓居に訪ひ暫く仝女と談話することを得たれば例に依り其概略を記して之れを江湖の姉妹に報ぜんに仝女は、

年齡四十五六歲の

崛強なる婦人なり一見するも流石に薙刀術に長けたりといふだけありて其骨格といひ容貌といひ如何にも一個の壯漢を欺くばかり逞しげなる人なるが偖は仝女に接して親しく談話なし居る内には却てなか〳〵に婦人の婦人らしき點をも多く見出し得つるなり、今試に其一二を擧げていはゞ仝女は其眼光の鋭きに似ず其微笑せらるゝ時の顏に幾多の愛嬌を含みたる或は其風采の武骨氣なるに引換へ其擧止動作の嫺雅にして優しげなるなどは殊に目立ちて愛たく覺ゆる處ありき。ものに譬へていはゞ先づ根幹拮崛たる老松の梢に二三の紅花の咲出たるが如し其當然花あるべき樹木に於て花を認めたるよりも一層興深く覺ゆるは自然の勢ならんかし。予は是に於て斯く思ひぬ世の多くの人々は今の女學生等が躰操術を學ぶを見て

女子の躰度の如何に荒々しく成行くかを懸念するものもあれ共是は無用の心配ならんのみ且し女子が如何程身躰强健になりたればとて矢張女は女として天然の優さしさを何處迄でも備へ居るものを、只管に優しといふのみを女の德となし爲めに其の肢躰の發達を抑さへ、人物の柔弱を欲して却つて天然の美を損するが如きことあるは洵とに歎かはしき事なりと。

斯くて予は、

仝女の鄕關及師匠は

と問ひたるに仝女は幕府の旗下某の女にして東京は即ち其鄕關なりと答へらる。師は武甲齋强矢長輔とて其頃世に名高き武道の達人にて四ッ谷に道場を搆へ數百人の弟子を擁し居たる人なりとの事なり。而て劍術は一刀流の達人にして薙刀の流は戸田派武甲流と稱す女の弟子も五十名程ありし由しなるが、此武甲齋の門に入りて武甲流の皆傳を得たるものは古登女一人のみなりといふ。予は次に仝女に向つて、

薙刀術修行の歴史

を問ひたるに仝女曰く妾は如何なる故か幼けなき時より頻りに武術を好めり十六歳の頃初めて武甲齋の門に入りて薙刀術を學び夫より八年の間は專ら此術に身を委ね熱心に修行したるを以て其間殆んど瘢瘡の絕間なかりし程なり。二十歳前後の頃父母は屢ば婚嫁を勸め玉ひしかど妾は敢て從はず切に迫られたる時に於ては妾は細々と遺書を認めて既に自殺せんと試みたる程なりき。左ればにや後には父母も妾の志の奪ふべからざるを知り妾が爲すがまに〳〵爲させ玉ひたりき。故に妾は遂に廿四五歳までも他に嫁せず專ら武術を錬りて日々男子の群に交はり往々烈しき試合等を爲し居たりき。尤も其頃は彼維新革命の時に際し居たるを以て全國の士氣一躰に何となく殺氣を帶び或は佐幕といひ或は勤王といひ紛々擾々として議論沸騰し居たるを以て女ながらも平素武道を心得居たる甲斐にいざ鎌倉といふ時は薙刀小脇に抱込みて君の馬前に仆れんなど常々心掛居たりし。左れど遂に其の事なくて止みぬ但今も猶忘れぬは丁度其頃の事にてありき舊阿波の藩士某と名乘りて師の道場に來りたるものあり妾を名指して試合を申込みたり、妾も氣の立ち居たる時節とて道は面白しと答へて直ちに引請け試合を爲したるに如何なる拍子にやありけん彼者は其の始め阿波の國にて一といふも二とは下だらぬ劍術の達人なりと大言吐きて來たりたるにも似ず散々に妾に打敗け腰を摩すりながら這々の躰にて去りたりき。妾の方にては

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時勢の常とて故意に之れを傷けたるには非ず去れども彼にありては河波は勤王の方なり妾は幕府方の者なりといふを以て故らに妾が彼に辛き目見せたりとや思ひけむ夫より數日を經て彼士の朋友共六名許り語らひ合せて師の道場に來り這回は六名にて交る〱妾に試合せんと頻りに乞ふて止まざりき。師も良しあき事を仕出かしたりとは思されながら默止難くて妾の父許其旨報知し給ひぬ。妾の母なる人はさすがに軟弱き女性の常とて此事を聞き痛く驚き歎き玉ひ扨こそ平常よりいはぬ事か女に入らざる力業して良しなき遺恨を招きたる事よ御身如何に嗜める路なればとて荒くれたる男子六人を相手にしては迚も叶ふまじ生れ付の容貌善からぬが上に若しも此上怪我あどして取返しのつかぬ癈人とでもなる事あらば此母は何とかせむ、今日は病氣と斷りて行ぬこそ宜けれと涙ながらに止め玉ひぬ。父にて在す人は流石に猛き武夫とて却て母人を叱り玉ひ妾を勵まして宣ふやう、始めての試合の時なれば兎に角、今日は先方より遺趣返しにとて來りたるものを若し否みて行ずは卑怯とやいはれむ臆したりとや下げすまれむ、善し往け往け往て命を失ふ事ありとも其は汝が好みての所爲なれば亦た誰をか恨みん逃げて一生の恥かゝんより道場にて死すると却て汝の本意なるべし、父が許す、直ちに行きて立派に勝負をなし來よと。嚴敷言ひ放ち玉ひしは、却てあか〱に母親の涙ながらに引止め玉ふに彌増して、妾の胸を劈くばかりにてありたりき。

深夜の星

こゝろの歌

かすみ

西行の歌に、

何者のおはしますかは知らねども、
かたじけなさに涙こぼるゝ。

チイヅチルスの句に

"To me the meanest flower that blows can give thoughts that do often lio too deap for tears."

人知らぬ野末の花もうち見れば、
なみだあまりて言ふよしもなし。

子供の小說

罪なきと、即はちシンレッスと云へる事は我國に少なきやう思はる、此は樣々の故よしあるなれど、一ツには子供と云ふものを知らぬによる、日本人にして能く子供の心を知れるものありや、又日本の小說に子供の事を穿ちたるものありや、此等の共に欠たる大にしては邦民に無邪氣の念うすきとを現はすの兆たり。われ此頃ろロールド、フホント

レロイを讀み、子供を主人公にしたる小説の最とも清く潔ぎよきとを知り、我國にも亦かゝるものありたしと祈りぬ。フランセス、ウイラードは平素小説を好まざる人なり、左れど、其の自叙傳幼時を追懐するの節に云はく、妾わは幼けなき時、たゞピルグリム、プログレツを讀みぬ、其の感化今に殘りて妾わが一生を支配せると少なしとせず、左れど今は「リツトル、ロード、フオンテレロイ」の如き小説あれば、今人には妾わ等にまさる最と大ひなる幸わひあるなり。

ものは見方

カーライルは天地を見て一つの聖殿の如しと云ひ、ハムレツトは牢獄の如しと云ひぬ。一つの諺に云はく、人に惡人なしと、又の諺に云はく人を見ば盗賊と思へと。樂天家は世を無上の樂園とし、厭世者は世を定めなきの浮世となす、美人も衣てより之を眺むれば巧顔あり、裏より見へば肉臓臭をつんざく許りなり、人は見やうこそ大切なれ。

家をうつす

己れ近ごろ家を更ゆ、將に出て立んとして悲しきと嘆きせず、或る人の如く啼にても殘さんと思ひつれど夫すら謂のはざりき、見かへりつゝ出でぬ、あゝ我が家。長明が方丈記に、行く川の流れは絶えずしてしかも本の水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは且つ消え且つ結びて久しく留まるとなし、世の中にある人と住家もまた斯の如しと。わが家未だ失せずと云へども、之を離るゝとあり、流轉極まる所ろを知らず。若し永世を信ぜずんば、愛はくるしきもの也。

口に毒あるの人

山下石翁

些細の事に口を着けて、人を惡しざまに言ふ僻は、實に忌むべきとなり。凡そ人の美を害むるは、先づ其人の名譽を高くし、次に其人の善を奨勵し、且つ一般世界に向ひて著者の實價を廣告するの德ありと云へど、人を惡しざまに云ふは恰かも之に正反對するの不德あるなり、其人の名譽は夫丈けに低くなれり、其人は心地惡しくなりて反つて邪念を起すとあり、世人は之を聞て何如にも世には善者あらぬもの哉と安心し濫北して惡に進むものも出て來べし、終に何等の効なくして至大の害を流すべき也。他の善を保護せんが爲に止を得ず人の惡を暴くは何ほ可なり、其人の惡を公けにして不善の大ひに行はるゝを制するときは亦可なり、たゞ故もなく兎角に人を惡し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ざまに云ふほど歎かわしきはなし。斯る人は悪しきことを見出さんとのみ心掛るが故に、人の美を認ること少なし、自からの脩身に取りて何如斗りの不幸ぞ、愛は人の悪しきを念はず、君子は人の美を成すと、吾れ人共に愼しみたきことにこそ。

きよめぬ庭　其十九

洒落齋主人

夏のそら

あきすてし螢なつかしきほどゝぎす、雲かくれにし夕より、こゝろまちし京のけしきも、いとふるびたれはとて、玉川に鮎の網ひかし、大宮の公園がほとりに螢火のあとを追ひ、近くは瀧野川に瀧つ瀬の水を汲み、水神の杜に船まつ風をうけ、此の暑さいかにしてやりあん、伊香保、草津の温泉もあきたり、碓氷、榛名の嶺越えんか、氣車に便りて日光の山、塩原の温泉に遊ばんか、庚申山に天然の石橋を渉り、三つの嵓室を索ねて、犬飼現八が跡を追ひ、山猫の退治せんか、或は磐梯山に攀ぢ登りて破裂噴出の地を踏み、地質學者の踵につきて地層の情態を究めんか。しからず〴〵かゝることはいとあら〳〵し、風流士佳人のなさん所爲にあらず、氣の合ふた同士かたらひて、新たに築かけたる逗子の海に遊ばんか、いと氣色よくいやが上に國手の保證もありと云ふ。いな〳〵かしこの海には海蛇となん云へる虫澤にて、あやまちて此に觸れなば足を傷けられん、さては土地も面白からずとて、先きには保證したる國手も、今は好しからずと云ふときゝぬ。さらば鎌倉、かしこはよろしからず。いで江の島はよかんめれ、されど此所も見あきぬ、そがもよりの鵠沼、かしこもさほどのところにてはあらず。大磯の海は岩多く、波荒くして海水浴にはいと相應からぬ土地なり。熱海は其の名の如く暑ければ、それよりは箱根の七湯、湯元はものかは、塔の澤、蘆の湯、宮の下、堂が島、底倉、木賀はいと優あり、小涌谷は湯も濁りて暑さも強し、されば箱根の宿にせんか、湖に小舟浮べて蘆の間に茶をたづねまたは、岸邊に魚を捕へんか、さらずば兼好が

清見がた波ものどかにはるゝ日は關より近き三保の松原

と詠じたる清見の勝景、あるは

田子のあまのやく鹽竈はふじのねの
ふもとにたへぬ煙なりけり

と詠じたる田子の浦邊に遊ばんか、などさま〴〵なる氣色の心のうちに浮び出たるに、ふと思ひ起せば西の京の空、浪花の蘆のふしの間もいとまあらば索ねみんと、かねてより思ひ

居たれば、此の夏の閑暇を幸ひ、いで明日よりかしまだちと、忽ちに行李絡ひつゝ、汽車のたづきによらんはいと容易けれど、徒もおかしからずとて、汽船に乗り二十時あまりの時をへて、船は神戸の港になん着り、此所に暫しがほど足を息ひ

　たちぬわぬ衣き人すむ山かげになに山姫の布さらすらむ

といふ布引の山に登りて、雌雄の兩つの瀧に浮世の汚を流し、それより有馬の温泉を傍に見て、浪花の地に至る、淀河の納涼をこゝろむるにげに、かほどに、よき納涼はあらじと思へり、住吉の浦に岸によるてふ姫小松、堺の濱の夕涼などのこるくまなく見めぐりて、今日は西の京をさして出ぬ。此所は三條のほどりなる家に宿をもとめ、其夕は四條の納涼に暑をわすれ、明る朝とく起出てゝ其の名はつねに

　わすれて見てもわすられぬ、其音は耳に有明の、月のかほ見りやいどいなは、昔のことのしのばるゝ、今はいづくとながめてみても、風のたよりもなつのそら、

眞葛が原、華頂山、圓山に杖を曳き、こゝかしこ見ありきぬ。宇治の邊りには知る人もあれば、そをたづねて名物の茶など乞ひうけんとて、いそぎ行くほどにしばしゝてそが家に着きぬ。主人はうちにや東の京なる美芳野舍の君の邊に住ふ、洒落齋ぞ索ね來たりぬ、こやなう〳〵と云ふに、そは珍しの客人やと、内より枝折戸ひらきて、主人の翁は出來ぬ。此方へと云ふがまゝにうち通りて、時の應答かたの如く終れば、主人はわなみをもてなさんとて、素麵と云へるもの調じて出しけるが、からしの粉たづね出さんとするに、紙袋にしか〳〵の名ども記あらず見出しにくしとて、いたく困り居たり。やう〳〵さがし出たりと見え、そをとり添へたるが、夜に入りたる頃此家の子ある可し、總領の甚六とか稱ふるが歸り來りて、吾なみにも禮をなしぬ父なる主人それに對ひて、何れの紙袋にも、それ〳〵入たるものゝ名かきつけおかざれば、いそぎのとき用にたゝぬぞかし、よく心得よと云ひ付けぬ。わなみも主人もみな臥戸に入りてふしぬ、朝にありければわなみはいと早く起き出たるが、淨手に行んとて次の間に主人のふしたるところ過んとて見れば、そこにかけ渡したる紙帳に、太やかなる筆もて

　此の内におやぢあり

となん、すみくろ〴〵とかきたり、そが息子のわざなる可し。

○グラッドストーンの子孫

先頃某氏が其孫に洗禮を施し、名を命ぜんとせり、氏は四人の男兒と三人の娘ありて三子二女は既に婚せり、而るに先頃命名せし孫を加へて其の孫僅かに十二人なりといふ、其故如何にと云ふに其子女の婚する遲きが爲めなり、長子は三十五歳にて婚し、次子は四十一歳にて三子は四十歳にて婚せり、而して四子は將に四十歳に達さすれども未だ獨居す、二女に至つても亦其嫁するや甚だ遲かりしなり、其年齒に今此に公會するに忍びず、三女は數年前よりニウマン大學の副校長となりて未だ嫁せず、是其氏の孫兒を得る少き所以なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

うき世（其十一）

ひほる

また余の知れる人に情薄き人ありけり、一人の處女と契結ひぬ其後他によき人あるとて之と交りを絶ち約を變へぬ、余は其義しからぬを告げぬ、遂に聞き入れざりけり、なとの事はよくも知らず、男の心は水波に浮ぶ泡、あはれ賴みがたなしと女子の喞つらんも理りぞかし。

今日は是昨日に非ず、桃花流水窅然として行く、移り變はる世の人心、譬へんにものなし、或は互みに深く思ひつめ、障り出でゝ心を果さぬもあり、または思はぬ人に思はれつ、思ふ人には思はれぬも多かるめり、いと憐れなるは心なき人を心より慕ふ人にぞある、余は幸なき身となりにし故か、斯る敢果なき事ども心づきぬ、人余の云ふを聞き苦しとや思されなん、されど是れ誠にありし事なりけり、實に浮世憂愁多し嗚呼筆を投じ、坐して見る、夕陽の西天に落る時、浮雲暮風に靡くを、夕鴉鳴き渡り、庭上寂歴たり、愁歇み難し。

余は常に密室に閉居し、喧擾雜沓の塵界を脱し、浮虛空漠の人世を逃るゝを樂しみぬ、余が友どち余を慰め、心思を快愉になすべきを告げくれぬ、されど余の心ば變はる事なし、余の見る所誠に現世はうき世なり、悲愁慨嘆するは止む能はず。

されど余は徒らに悲哀愁嘆せじ、空しく痛悵長恨せじ、余は遂に悟りぬ、余は今千愁萬憂に身を傷ぶる、現世に置く露の命常に消えや果てなん、打眺むれば西の山の端にかゝる浮雲に、三日月のかげ隱れはてんとす、嗚呼余の身は彼の月かげの如く墓なしや、墓なく消えて行く末は北邙山嶺の烟とならず、墓上一滴の露と化せず、烟となり、露と化せんは余の肉のみ、余の肉土より出で亦土に化す、されど生て命を此土に寄せ死しては遂に歸るなりけり、我亦歸する所あらんを信ず。

天日晝夜光を絶たず、茫々千万里究極する所を知らず、至る所木茂り、草生ひ、百花美を爭ひ、千香芳を戰はし、鳥歌ふ、其の聲樂しげなる事限りなし、獸遊ぶ、其快げなる事云ふ可からず、萬民雪の如く白く、衆生水の如く淸き處に歸り行かむ、此處に至らば不義、惡慝、貪婪、暴狠を充すの人絶え、妬忌、凶殺、爭鬪、詭譎、刻薄を盈す者もなからん、其他讒害、毀謗をなし、狎侮、傲慢、矜夸、譏詐、頑梗、背約、不情、不慈なる者あるまじ、實に美はしきみ國なるらん、余は斯るみ國に歸らまくのぞむ、誠に死す時肉に苦痛を覺れども靈生には大ひなる幸福ありと或人の云ひけるこそ理りなら

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

め、余は今樂しき御國に歸らんを切に望む。

余が病の床にありける折余が嘗て交りし一人の處女常に余を見舞ひぬ、清眼温容自ら萬斛の愛情溢れ、玲瓏の音もて歌ひぬ、歌に曰く「うき世の中にも望みを與へ、なぐさめ玉へり云々」と病の床に在りて徒然なる時、世の望なきを思ふにつけ、此歌を聞く毎に愈固き希望を後の世に持ちぬ。

罪なきに累紲の災に罹れる人ありけり、虐吏の手に引かれ、天涯萬里に貶謫せられんとせし時父母兄弟打集ふて其不運を嘆ち、別離の際に忍びけり、捕はれし人身の運命を悲しみ、住なれし故郷を立去るに忍びず、幾度か顚躓躊躇せり、心は謫所に急がねど脚移るを如何にせん、思ひは貶せられんを望むにあらねど人待たざるを如何せん、遂に配所に着きぬ、次で身は囹圄に繫がれ、心は悲痛に沈みはてぬ、窓戶空しく乖して配所の月影暗らく、牢獄屋を蔽ふて滴炮の日光照らさず、見るもの悲しみの種となり聞くもの絕望の媒となりぬ、捕はれし人獄舍に在つて歎ひたりけり、曰く嘗て眞の道を聞きぬ、されど我欲の強きが爲めに之を信ずる事なかりき、誠に萬民の主、萬王の王なくんばあらずと信ぜしかども只信ずるのみ、熱心に求むるの心起らざりき、今親愛ある双親に別れ、不幸運命を感ぜし日、悲愁痛嘆を覺えし時、始めて眞正の道に立歸り、眞心もて眞理に從ふの心起りぬ、憂苦ありて遂に眞の道を知りぞ、天意の存する所夫れ妙の又妙。

余が後の世に固き望みを置かんも亦此理りなりかし、太古人類の祖先天意に從はず、よからぬ木の實を貪りぬ、罪是より始まりて萬民遂に惡染するに至れり、末代となりはて、世は澆季となり變はり、惡、惡を生じ、罪、罪を出し、罪惡紛々誠に厭ふべく嫌ふべき世となれりけり、人性惡なるか、余之を知らず、人性善なるか、余之を知らず、只知る今の世の人罪惡の内に生存する事を、余は最早斯る世に望みなし、樂しき御國に早く往かまし。

余は常に思ひぬ、心あるものは常に身を嘆き、世を嘲つべきものなるを、古より人に勝れ、衆に擢でし者は憂愁に沈まぬ事なかりき、悟道淵深く考ふる所なく、只眼前一時の快樂に耽りて萬世永生の道を計らず、飄々として風に亂るゝ木葉の如く、虛々として花に睡る胡蝶に似たり、只生れ出でゝ空しく死し去るのみ、肉朽ち、骨碎け、罪惡深き靈魂亦盡くるなきの火に燒かる、斯る者こそ誠に蜉蝣の生れ死ぬる樣に異るなし、余は斯る世とも悟り得て眞の道を知りしぞ嬉しき

事の限りなりける、先の幾千百の憂愁怨恨此に至つて融然氷解す、知んぬ、余は此に至つて果報者なるを。

世に蜉蝣に似たる人多かり、こゝに於て心あるものは歌へり空の空、空の空なるかな、都べて空なり、日の下に人の勞して爲す所の諸の動作はその身に何の益かあらん、世は去り世は來る、地は永久に長存なり、我日の下に作す所の諸の行爲を見たり、嗚呼皆空にして風を捕ふるが如しと、世の墓なき樣實に斯くぞあるらむ、世の人心して蜉蝣と失せ去る勿れ。

數ならぬ身の上のよしなし事長々しく書き置くなど、人見て如何に思ふらん、余の不遇薄命は云ふにも足らず、只余の身の上を見て人聊かだに悟るあらば余の望みは足る、今日明日を知らぬ身のなど世の人の憐れみを求むべき、知らざるなく、在さざるなく、至慈至愛の者余を愛し給ふ、患難、困苦、迫害、飢餓、余を圍むも余は其愛より絶れじ。

黒雲空に重り、暮風地を捲て起る、須臾に雨滴軒簷に流れて蕭々たり、一鳥空に鳴く、聲遠く聞えて影雲井に消えはてぬ、打ながめ、筆を擱て思ふ事多し、寂寞たる窓裏病床に考ふれば嗚呼余は昔の余に非ず、誠に多幸の者となれりけり、余は今故鄕の母上につき少しくものせん。

寄書

華族女學校卒業式に於ける
學監下田歌子女史の演説

左は其筆記なりとて下田氏方保思惠子の寄送を得たるものなり、其儘に掲ぐ。

謹みて、

皇后陛下の御前に拜し、次に、滿堂の貴女紳士に白す。殊くが如き、この異さなも厭はせ給はず。辱けなくも我が

皇后陛下は、本校生徒、卒業證書授與式に御親臨遊ばされしは、最さく〳〵、畏き事にこそ。且つ、朝野の貴女紳士の、斯く、來會せられたるは、實に、本校の面目なるのみならず。卒業生徒の光榮、此上も無き事と云ふべし。

今、校長より申し上げられし如く、本日卒業證書を授與せられたる生徒は、七名にして、內、二名は、別科生なり。即ち、其人名は、託摩登茂子、長與保子、高壙延子、藤里子、隈川千世子、阿部恪子、吉野勝子、にして、其學び得たる學科は、國文、漢文、歐語、地理、歷史、數學、理科、家事、習字、圖畫、手藝、音樂、體操等なり。就學の歲月、短きに非ず。初等中學に編入せられしより、既に、滿五年を經たり。其勉強の效空しからず。今は、高等中學第一級を卒へ、斯く、全科卒業證狀を授與せらるゝ榮典に遭遇せられぬ。但し、吉野勝子は、昨年二月より、阿部恪子は、同じ十二月より、已を得ざる事故ありて、別科生となれりしなり。然れども、其以前、殆んど、滿四ケ年は、全く、本科を學ばれたりき。さて、これよりは、卒業せられたる方々に一言せん。

貴方等は、今、各學科を卒業せられて、本校を出でらるゝに際し、如何なる感覺を起し給ふか、差し向き、先づ、本日の盛典に預りて、こよなく、嬉しく思はるゝならん。次に、また、今より、世に出でゝ、事に當りたらんには、云々の事は、斯う〳〵爲んと、種々の考へありて、將來の希望は、定めて、多かるべし。

凡そ、人間の志しは若年の時に定まるものにして、畢生の目的は、常に、須臾くも、拋却し能はざるものなり。志し無し、目的無しとせば、人事已まん。學業、いづくにか施さん。貴方等は、日々に、本校に通ひ來りて、一念專一、苦學せられ

たる所以のものは要するに、卿等が志ざしを立んが爲めのみ、其目的を擇ばんが爲めのみ、其志しを行ふべき、道を知らんが爲めのみ、其目的を達すべき、法を求めんが爲めのみ。卿等が嚴父、卿等が慈母、卿等が兄たり、姉たり。倶に、卿等が勉學を勵まし、或ひは、戒め、或ひは諭して、日夜、苦慮し、多年、心痛せられたる所以のものは、みな、卿等をして、其志しを立てしめ、其目的を擇ばしめ、やがて、父母には、孝道を竭し、姉妹には、友愛を篤し、また、人の妻となりなば、其人には、貞節を主とし、人の親となりなば、賢母となり、君に忠に、國に報ずる念、もとより深くして、家政の事たり。交際の事たり。すべて、將來の、幸福を望みたるに、外ならざるべし。今卿等が、斯くの如き、類ひ無き、本邦、上位の學校に在りて、高等の學科を修められたるは、誠に無上の名譽なるべし。然れども、この名譽は、將來にありて、其實功を奏すべく、現在に在りては、却りて儆戒を加へざる可からず。こゝに卿等が畢生の間忘却す可からざる一事あり。婦人と云ふと即ち是れなり。卿等は婦人にして、男子に非ず。婦人には、婦人の分あり。婦人の道あり。婦人にして、婦人たる分を失ひ、婦人たるの道を忘れなば、猶、恰も、人間にして、人間たる道を、忘却したるに異ならず。若しそれ、卿等が婦人たる分を失ひ、婦人たる道を忘れ、其、婦德を汚すが如き、所爲あらば、卿等、多年、苦學の効、いづくにか存せん。卿等が今日の光榮いかにしてか保たん。不肖、余等(ワタクシドモ)の如き、卿等を教育したる者、また、いかでか、世人に、まみゆるを得べけんや。卿等、畢生の間、婦人と云ふ事は、深く、心に印して、長く忘るべからざるなり。卿等假令、才能、衆に秀で、才學、群を出づといふとも、未だ、必ずしも、貴重の婦人なりと云ふ可からず。婦人の、婦人たる所以のものは、即ち、婦德あるが故なり。人誰れか、婦德の心なからん。されども世人、悉く、婦德を全くすと、云ふ可からず。卿等が、將來、世に立ち事に當りなば、往々意外の事にあひて、嗚呼、浮世は、斯の如きものかと、獨り呻吟する、夕べもあるべし。然れども、世は斯の如きもの、斯の如きものは、世なりと、たゞ、自ら諦め、其分に安んじて、他日を期する外なき者と知られよ。假令如何なる地位に立ち、如何なる境遇に陷るとも、自ら、婦德を修め、其責めを盡み、其職務を辭すると勿れ。婦德は、主として、婦人の守るべき分なり。婦人は温厚にして、優美なるべし。謙遜にして、高尙なるべし。柔順にして、貞潔なるべし。節約にして、堅耐なるべし。これ等の者は、常に婦人の事ら、守らざる可からざる者なり。苟くも、婦德を守らば、婦人の分、自から立つべし。婦德は即ち人に、幸福を與ふる、静なりと知られよ。今、卿等が、此學校を出づるは、卿等か、處世の首途(カドデ)なり。前途、遼遠し。或ひは雨、或ひは風、或ひは雪、其難多、辛苦の闘を經ざる可からず。然れども、至誠の意を以て、婦德を守らば、必ず、畢生の行路、安全にして、不快の感無きは、まさに疑ひ無き所なり。卿等は、如何に、身を勞し、如何に、心を惱ますとも、敢て、名を、欲すると勿れ。敢へて功を求むると勿れ。また敢へて、人に誇ると勿れ。功と名とは、謙みてこれを、他に與へよ。これ、婦人の婦人たる、最上の德にして、特に、日本婦人の精神とすべき事なり。卿等果たして、これを實行せば、明治の貴女たる、面目を完うすべきなり。余(ワタクシ)、また、敢へて、他を望まんや。

今、卿等が、此學校を出づるにあたり。余の云はんと欲する所の者、實に多し。然れども、時に限りあり。殊に陛下の尊嚴を犯し奉るを恐れ、聊か、思ふ心の、片端を、述べて、本日の祝辭に代ふ。滿堂の貴女紳士、幸ひに、これを恕し給へかし。

○思ふまゝ

城北　[illegible]冷子

近頃ろ流行るものは。連合。顧問。ホフ。短遊。佛語。漢字。俳諧。人物評。コレラ病。發行停止。

欲しきものは。氷。風。清き文學。眞實の報告。眞面目(まじめ)の論文。廉直の政治家。義人君子。

惡らしきものは。力量なき議員(特に貴族院中に於て)。邪がる文學者。夜の月の村雲。トボケル新聞記者。

文訪

みれ子

●下野安蘇會來様　京都同志社に於て教授する學科は高等普通科と神學科とです○普通科の方は五年にて卒業する都合です、神學科には英語と別科とあります、英語の方は三年にて卒へるのです、是には普通科卒業生は試驗なくして入學を許し、他より入つて之を修めんとする人は一應試驗するのです、別科といふのは邦語神學科といへるを改名したのですから宗教及び其他傳道師に必要なる事を邦語にて教えるのです二三年前から英語も加はつてよく修めれば一通り讀める樣にな

ると申します○社則は郵便切手四錢封入にて申送れば直ぐ送ります○入學試驗の事は社則に精しくあります、近日の內に國民の友や國民新聞に生徒募集廣告が出でましよふから其れを見ても御分りになりましよふ然し切角の御問ひですから一寸申し上ましよふ、普通科の下に豫備科といふものが二三年前から設けられました、此處には高等小學科卒業生位の學力の者は入學できます、普通科の方は漢學十八史畧講讀、作文記事論說譯讀ナショナル第二讀本等なりと記臆します、尙精しい所は規則にて御承知下さいまし○其他同志社に關する事を申せとの事、如何なる種類の事ですか分りませんどうぞ今一度精しく書ひて御問ひ下さい知つて居るだけは御答申し上げましよふ。

●京都 S. N. 生樣　御尋問の件は本誌二百廿二號女塾別舍主義と申す社說を御讀み被下ば御譯りになりましよふ。

●三田四國町 R S O. 生樣　學生に適當なる避暑地は何處なりやとの御問ひに對し私の考へまするには房州の海岸が最も宜しひだろうと思ひます同地は隨分景色も宜しく肴も多いとの事です、亦鎌倉近傍に至つて土民の家を借り居るも宜しひでしよふ。

●愛讀の一書生　ナショナルリーダーの四か五を御讀みになつた位の處で小說を御讀みなさるのは六かしき事と思ひます御存じの通り小說類には俗語が多くは入つて居るものですから却つて歷史もの抔よりは讀み惡いものです然し英小說の讀み易いものを仰せに從つて擧げればロビンソン漂流記、ガリヴアー旅行記、アラビアンナイツ等でありましよふ、私の思ひますには歷史其他の六かしき書に依つて充分に字を覺えて後に小說類を讀む方が得策でしよふ。英學を進步さするには多く讀むより外に方法はありますまい教師があつて之に就て學ぶ事が出來ますれば之にこす事はありません若教師がなければ字引に依つて辛抱して讀むのが最上の方法だろうと考へます。

●御問ひ合せ申す　仙台なる一女生より下の如き御問ひ合せがあります曰く此土用休に於てよき基督敎信者の御世話を願ひ且心事を吐露して相談を乞ひ品格を養成する等大切なる事に此休暇を費さん事を望む信者にして不信者の間に立つにはよき品格を要する故是非此休に養ひたし最も凡ての入費御禮とは充分に拂ふべしよき所あらば御世話を乞ふ云々篤志の人ありて御世話被下ば何卒御姓名を當社迄御通知あらん事を願ひます。

●御通知を乞ふ　高曾根重左衛門君の御住所を承りたし至急御通知を乞ふ

時事

新らしき集會及政社法

集會及び政社法發布せらる、前條例に比較して大抵自由寬大になれるとと覺ゆるに、獨り未成年の人及び女性の加入するとを一切禁止するに至りては、前に較べて大ひなる相違と思はる。女性は何如に學識ありとも如何に壯年になりたりとも其女性なるが故を以て政會及び政社に入るを得ずと、之れ大に研究すべき問題なるらん。

是れ政談

直接に現政事を可否するとは暫らく言わず。例へば娼を廢し、妓を制し、禁酒上禁令のあらんとを促がし、教育上女性の注意を加へんとを求むるの類ひは、常に婦人倍切に論及すべきの問題なるべし、然るに如此き問題に付きて講談するとは政談にはあらざる乎、而して其政談なるが故に、女性は一言も口を出すと能わず、曾に口を出しがたき耳あらず其講談をすら傍聽すると能わざる乎。

研究せんとを欲す

女性が政社に入るの事、或は禁ずべし、其政談を聞くの事に至りては、抑そも何等治安妨害の元因となる乎。之れ吾人が今尻大ひに研究せんとを欲する所ろのもの也。

猶ほ流水の如し

然りと雖ども、水之を激すれば奔躍す、初めより之を靜に沈流せしめたるの比ひにはあらざる也、人は聞かれぬと云へば聞きたく、見るなと云へば見たきもの也、吾人惟ふに女性之より大ひに政事に注目すべし。

博覽會場女人禁制の場所

今年の大博覽會に、女人禁制の場所一つあり、若し無らましかば、大抵は見ずして過ぐべし、其余り衆々しく認ためあるの故を以て、姉は弟に、妹は兄に、妻は良人に、母は子供に、女教師は男教師に、女生徒は男生徒に其中何者の在るにやと掛念して聞けり。此時顏を赤らむるとも出で來し、猥褻の話しも起り、宜しからぬ人情も出でたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

子守堂若衆倶樂部

江州滋賀郡下坂本村と云へるは戸數六百餘戶ありて可なりの村柄なれど兎角に風俗惡しくして夜に入れば土地の若衆と稱する輩三々五々隊を爲して甲所の辻乙所の往還に群集し村内の少女を誘出して之れと遊び戯むるゝが常にて習慣さて親々も差して咎むるとなきより此惡弊は年一年と倍々增長し近來は各家に雇はるゝ子守までがまた頑是なき子供を連れて此の群れに加はり云ふに忍びざる惡戯を爲すより斯は本人共の不爲は勿論小兒の爲めにも宜しからすとて此程村長初め村會議員等打寄り某本財產の内より多少の出金を爲し子守小女のためには子守堂といへる一の遊び場所を與へ若衆の爲めには一の倶樂部を設けて男女一緒に遊ぶとを禁ぜんと昨今頻りに協議中なりと云ふ（中外電報）

結婚媒妁所統計

日本橋區檜物町なる結婚媒妁所にては年々聟嫁貰ひ方呉れ方の依賴追々に增加し目下の勢を以てすれば前年より一層多く上下兩半期を通じなば一千有餘名の依賴者あるに至らんか然れば其前年より右依賴者の多き原由は其年の豐凶及び融通の如何を推知するに足り又併せて生活上の難否をも知ることを得べし今當上半期間の統計に據れば本年は春季以來世間一般に不景氣の折柄殊に米價は非常に騰貴して融通の道開けず生計の困難はいよ〳〵甚だしく其筋に於ても外國米を競賣して米價の暴騰を制せんとするも其甲斐なくます〳〵昇騰せし有樣なれば何れも中等以下の類族は生計上の困難より聟、嫁、小兒の呉れ方競つて多く其貰ひ方となるべき依賴者尠なかりし左に同所に於ける本年上半期間の統計調査を擧ぐれば

呉れ方		貰ひ方	
聟	百五十名	聟	四十名
嫁	二百十五名	嫁	百六十名
小兒	六十名	小兒	十五名
合計	四百廿五名	合計	二百十五名

右の如くにして呉れ方貰ひ方の族籍を區分すれば呉れ方華族四名、士族百八十名、平民二百四十一名なり又た貰ひ方は華族二名、士族百名、平民百十三名にして首尾よく結婚相談の纏りし者は男女合計百八十名なりと云ふ（同所報告）

世間忙々

事業論の著者、已れ四方を見、活ける世界に於て義人の漸やくに死につゝ行くを察し、痛哭す。嗚呼人は山に於て聖人たると易し、市に於て義人たるは難し、校舍に於て傳道すると易し、銀行に於て道を守る難し、年少の同士須からく固く決意すべし、斷じて邪路に入る可らず。

何處に同志者ある

名なき文學者は文章氣力あり、一と度び大家と爲れば旣に凡々たり。傍らより見て政治を評するときは頗ぶる直言せり、正に路に當る時は例然として官臭を發つ。討論の日には慷慨の士なり、事業に着手する時は俗人なり。苟しくも如此くんば天下何の日にか淸まん。

此頃の新聞紙

此頃の新聞紙は浮き信じ難きと多し、特に不羈中立などと稱する種類にして往々流言を放ち、故意に之を抑揚せんが爲めに、種々の雜報を製造すると多し、而して今后進歩黨聯合の事益々成就せんとするに近づくほど、又た帝國議會開會の期日近づくほど、益々此種の製造多かるべし。讀者は餘程用心して讀まざれば輕薄者の爲に大ひに誤まらるゝとあるべし。

雜報の造り手

世間何の處ろに眞實正直の新聞ありや、曰く數多あるべし。但だ只だ主ある記者は只管らに社說論說の方に身を入れ、新聞紙に於て最上の要所とする雜報に重きを置かず、余り感心しがたき人物を點て此職を埋むるが故に、扨ては意外なる者も出で來る也、此邊今一歩進みたきもの也。

ギウリキ女史

四年間マウントホリヨーク女大學に留學せんとて、去廿七日米國に向け出發したる同女史は、元と支那人なる宣教師ギウリキに養はれて人と爲りぬ。長じて后ち日本の爲めに働らかんとするの精神盛んなれば、其が便を計り教師宮川經輝氏の養女と爲りて、純然日本人の籍に入り、宮川まさ女と名乘る。吾人は其出發前くはしく其志ざす所ろを聞くに、精神の固きと將たゝ感歎すべし、女史は云ふ、大學に三年留學し后ち師範校に入りて教授法を學び、日本に歸らば英語教授の爲めに少かにてもお國の益を爲さんと。女史は九年前神戸英和女學校を卒業し、后二年間横濱フエリス女學校に學び、以后六年間全く神戸に於て實地教授に從事し經驗少からぬが故に、其の米國に於て學識する所ろも亦尋常の洋行者の如くならじ女史今ま齡ひ二十六、春秋正に富みて前途望み多し、吾人は其健全にして歸朝の遠からんを待つ也。蓋し、初めは支那人たり、中比は西洋人たり、最后に日本人たりとは、奇緣淺からずと云ふべし。

ピアノ及びチルガン

英國の女新聞は日本國の皇后は近來切りにピアノを好ませられ日耳曼の二婦人を教師として毎日斯藝の御けいこ遊ばさる云々と記し奉りしが、斯る事まで外國に知らるゝは愚か、當今一般にピアノ及びチルガンの流行し來りたるは實にかくれなき事實なり。左れは三四年前迄は高貴の邊りにてもピアノ備付らるゝは少かりしに當今は府下にも二千台以上地方に凡そ四万台程もあるに至りチルガンの數は中々に數へがたきよし、或る樂器商は云へりと聞く。

禁酒上大運動

近頃ろ英國の都ロンドンにて目覺しき示威大運動會ありき。此は政府が飲酒店（曖昧屋に近き）にて酒を賣ることを禁じたるの報ひとして百七十万弗を配與するとに付、心ある人民一齊に大反對し、輿論を喚起せんが爲めに催ふしたるものと知らる。運動行列の中には兩性交も入亂れ、特にリチヤード、コブデンの令孃たるサエーン、コブデン孃は主府婦人改進黨より引出せる車の上にて演說し、婦人二錢新聞社は大ひなる車上に「我社は禁酒に贊成す」と云ふ大旗一流を翩翻と飜がへし、車中にはユニチン、シグナル雜誌のフホスター夫人及びアムス孃をも見受たりき。會するもの万種万樣にして互ひに異なれども、只同一に叫ぶ所ろは古來英民が不足の租稅に反對するの聲にして、We don't owe, and we won't pay 吾等負ふ所ろなし、吾等拂ふべき所ろなしと云ふにあり。

フホーセット女史の名譽

三年前古典學に於けるラムセー孃の名譽は英國及全歐洲を震動し、其頃の女學雜誌にも見へたるが、女性は蓋し文學にのみ卓越したるにあらず、彼の世人が女性の最短所なりとする數學に於ても亦た大に卓越し得るの明證を出せり。即はち英國カムブリッヂ大學にて數學の最高試驗を催ふし數多ある競爭者中其第一等に位したるものに、Senior Wrangler 最高優者と云へる尤とも譽れある名を與ふるとなるが、今年は先のフホーセット學士の遺娘にして、女權家フホーセッチ夫人の愛孃たるヒリツパ、フホーセット孃之に及第したり。而して父フホーセットが此試驗に會したる時は、前夜殆んど眠らず苦慮して遂に倒れたるほどなるに、孃は冷々として沈靜し出入應對寧も平常に異なるとなかりしよし。今や英國に於ては其評判鼎の沸くが如く、パル、マル、ゾセツト新聞の如きは、社說にも雜報にも格外の長贊文を揭げたり。又孃の出處たるニウヘム女大學の生徒は言ふ迄もなく、多くの友人市人は己の娘の事の如く皆狂へる迄に之を祝ひ還れり。

卒業女學生（三）

東京駿河臺、女子神學校
中谷ワサ。松本ナデシユよ。佐藤マトロナ。北條マリナ。

同築地、立教女學校
本科卒業、三浦れん。田中きさ。

高知縣尋常中學校女子部（本年初回卒業生）
楠嶋醫。千頭𠀋。高田千鶴。松山金樹。上田々鶴。根來胤雄。藤戸楠。坂本文。川崎佐野。中嶋里枝。

東京女子學院（元櫻井女學校）
幼稚保育法卒業。奧野いく。尾崎夫人。
他の十七人に年級の卒業證を渡す

華族女學校
全科卒業。託摩とも。長與保。高城延。藤さと。長川ちせ。岡部格。吉野靜。

●婦人矯風會　小島きよ子は書記を辭しぬ、又事務總理寄附金調査委員を栗津ひさ子に托す。

●佛和女學校　の事は余り世に聞えず、故に東京メールにより左に記せば、去る十六日佛和女子學校懸賞授與式を催せり、當日は監督ササウフ、佛國代理公使我辻文部次官及び其他多くの內外の貴士令嬢臨式せられたり、生徒諸子が當日執行せし諸技能悉に巧みなりしには感服の外なし、殊に諸子が英語と佛語を話すに熟達せしは殆んど驚くに堪へたり、諸子は僅々二年か三年の間學ひしに過ぎず、而して其熟達斯の如し、之に次で最も巧みに演ぜしは歌なり、樂器を弄するに於ても音聲を發して歌ふに於てもよく熟達せり、次ぎに臨式者の注意を惹きしは內外の衣服裁縫縫箔等のとふり、是亦よく練達せり、之に加ふるに日本の教育も怠りなきが如し、當日辻文部次官の演說は大ひに內外の人士を粹益せり、我等は只生徒諸士の成功を祝し、併て同女學校の益々榮えんとを希望するものなり。

○看病婦學院　曩に櫻井女學校內に設立したる看病婦養成所を更に擴張し十二人の病人を給費にて入院せしめ乍ら實地に看病婦を養成せんとて前年募集したる三千圓の殘金八百圓あるに加へて更に三千圓の義金捐を募らるゝよし、ツルー夫人の名を以て廣告せらる。尚ほ同學院の主旨とする所ろは專ばら基督教主義に據れる看病婦を造るにある趣にて、其の發起委員はモリス、リード、トムプソン、ツルー、の諸夫人及びミリケン女史、並に岡見、渡瀨、鈴木、田村、種田、の諸夫人なるよし。

●西京女學校と師範校女子部並に附屬小學　去る六日以來有志寄附金を以て新築中なる京都府立高等女學校の生徒寄宿舍は工事大に捗取り既に九分通りまで落成したるが來る八月上旬に悉皆竣功するよしなれば來る九月十一日夏季休暇を終へて生徒等が歸校する節には新築の寄宿舍へ寄宿するに差支へなかるべしといふ又地方稅を以て去月下旬より新築中なる京都府立尋常師範學校女子部の寄宿舍及び附屬小學校の校舍は目下四分通り成効したるが夏季休暇中に悉皆落成せしめんものとて昨今工事を取急ぎ居るよし併し女子部寄宿舍のみは來る九月十日までに竣功すべきも附屬小學校舍及び保育科の校舍は同日までには落成覺束なかるべしといへり。

●函館吉祥女學校　同校は曹洞宗高龍寺の檀徒が去る二十一年に創立せしものなるが爾來改良を加へ校規も整頓し學生は二百餘名なり此程夏期大試驗を行ひ當日は區長及び書記等も臨席なし其優等生には區長より賞書を與へたるよし(江湖新聞)

●高知　高知尋常中學校女子部の卒業生は前に揭げたり、師範學校の女子部は校則變更の爲め本年はなし、英和女學校は二十五年度に至らざれば無し。

●長濱婦人會　は禁酒矯風福音傳播等を其目的となし每週一回會するもの十四五名にして目下は未だ手を外に出さず專ら自ら循むることを勉め互に所感並に將來の希望を懇談しつゝあり頗る有望の會なり。

●大阪　に一致、監督、プール、ウイルミナ、梅花等の女學校あることは人の普く知る所なれど、尙は知らざるもの二つあり。云く、永生女子傳道學校。建設は今プール校に歸せし舊永生女學校內にて本年三月頃設く校長はコツクス夫人生徒現今三名重に聖書研究月謝一圓傳道志願者を敎ゆる所なるが未だ組織全からず世人實に知らず來九月より口世に發表することゝなり。云く、聖マリヤ女子神學校。此四年前川口居留地メールス女教師の宅內に設く校長メールス夫人生徒現に六名此の人表札もなにも記しなし世人一も知らざる所にして規則も組織の立てあれども當時休業中生徒諸方の傳道に從事し校長も不在明に知る由なし(通信者)。

●石卷　にては婦女に職業を授けんとて高等小學校長永田氏等の發起にて某女を東京高島店に遣はし輸出向きハンケチの縫取り業獎勵に着手なしたり。

●仙台　宮城一致英和女學校の幹事藤生金六氏は同校募集金、爲め近地に遊說中なり又龜山てい女は此の秋期より教授せらる。

●萬國矯風大會　明治廿五年に合衆國シカゴ州に開く萬國大博覽會の時、萬國矯風大會を開くの建議出づ。

●ステツド氏の懸賞　有名なる彼のステツド氏(前のパル、マル、ブゼツトの記者、今の評論の評論の主筆)は年十八乃至二十八にして體格よく、世界進步の事に關はる論文を能く作りたる女史一人に對し、年に千五百弗の學費を給へし何處の女大學にても入學することを得可き旨を廣告し近日其試驗を爲さんとす。此は婦人の仲間に歷史を研究することを獎勵せんとするの主旨なるよし。

●レピツト夫人　は此頃ろアフリカ、コンゴーにあるよし通信に見ゆる (Banana, Congo Free State.)。

廢娼記事

●同盟廢娼演說集

其出版の意外に手間取りしは、演說者が多く他出して校合に手後れせしゆへ也、左れど最早數日の中に落成すべし、出來の上は先づ衆議院三百議員に手初めとして配達する積りの由なり。

通信

和歌山高等小學校女子部附屬幼稚園

附幼稚教育進步の狀況

當市高等小學校女子部附屬幼稚園新築落成に付本月十六日を以て竣功式を執行せらる該園は保母二名見習生三名園兒四十名從前は摸範幼稚園と稱し市內に摸型を示し且つ市內各部落の需要に應ずる爲め常に二三の見習生を置き現に字治部と稱する地に於て始成幼稚園なるものを設立せられなほ二三の他部落にも建設せんとするの兆候あり漸次幼稚敎育の必要を感ずるものゝ如し斯く小都會なる和歌山の地にして幾個の園を設くるは無用なりとの批評を招くことも多からんかなれども通信員實驗の考にありては此の如き方就園兒童を多からしむるの便あり遂には街上路頭に惡戲するの輩を見ざるに至らん。

女學生歸鄉

當地より東京京都并に大阪等の各女學校に遊學せる女生徒夏期休業の爲め續々歸鄉す各地各學校の敎育法一般ならざるいひ知るを得べく又歸後遊學せしめんと希望せらるゝ父兄の參考となること多しなほ親しく接見して後報道すべし。

私立學校の狀況

當市私立學校の件に付男子の爲めには數個あれども女子の就て學ぶべきものなく又私立女學校の名稱を附せしもの最初より一つもなし遺憾なり。

週報

○官令　二十一日勅令第三十四號にて日本帝國領事規則中改正の件同百三十五號にて官有地特別處分規則同百三十六號にて陸軍武官進級令改正の件同百三十七號にて陸軍々樂學會條例同百三十八號にて陸軍々樂部下士兵卒補充條例を裁可公布せらる●廿四日法律第五十一號にて執達吏規則同五十二號にて執達吏手數料規則を裁可公布せらる同日勅令第百三十九號にて官吏非職條例中改正の件同百四十號にて遞帑局官制の改正同百四十一號にて印刷局官制の改正同百四十二號にて稅關官制の改正同百四十三號にて稅關監吏補俸給同百四十四號にて稅關監吏及監吏補任用の件を裁可公布せらる●廿五日法律五十四號にて土地收用協議會規則勅令第百四十五號にて供託規則同百四十六號にて看守奉職滿五年以上の者を看守長看守副長に任用する件を裁可公布せらる●廿九日勅令第百四十七號にて海軍檢閱條例の改正同百四十八號にて海軍々人俸給令中改正追加の件同百四十九號にて海軍軍人手當金規則中改正の件同百五十號にて艦船の乘員俸給前後及糧食料前渡の件を裁可公布せらる

○宮廷　二十二日皇后陛下華族女學校へ行啓●廿六日天皇陛下陸軍士官學校へ行幸あらせらる

○政治　廿一日臨時內閣會議開かる●廿二日西鄉、芳川、陸奧三大臣は登閣せり●廿四日內閣臨時會議に山縣、山田、松方、靑木、芳川の五大臣東集せり●廿五日內閣會議に各大臣登閣せり●廿二日福岡に於て九州同志委員會を開けり●廿五日秋田に於て東北七州大會議開かる

○新誌　本週問都、朝野、日本等發行停止を命ぜらる

○叢報　廿五日舊福井藩主松平茂昭侯薨ず

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に涉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の教員孰れも熟達者員あり然して本校の教授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地

東洋英和女學校

廣告

看病法講習生募集

年齡十九年以上三十五年以下ノ夫ナキ健全ノ女子ニシテ家事ニ係累ナク常ニ本院內ニ寄宿シ得ル者三十名入學ヲ許ス志願者ハ本院ニ就キ規則書承知ノ上來ル八月三十日限リ願書差出スベシ但入學中衣食ヲ給シ患者ニ附添ハシムル時ハ手當ヲ給ス又入學試驗科目ハ本院規則等ノ讀方簡易ナル往復文ノ作文幷加減乘除トス

廿三年七月

東京本鄉元富士町

醫科大學第一醫院

香蘭女學校生徒募集

今般校則を改良し本科豫科小學科の外更に尋常小學科を設け九月十日より敎授す

麻布永坂町一番地

寄宿舍取締及英語講讀女教師各壹名雇入度御望の方は當校へ御來談あれ

東京市芝區三田功運町三十番地

私立 普連土女學校

日本評論

第十號(七月廿六日發兌)一冊金六錢〇六冊前金三十三錢〇十二冊仝六十四錢〇二十四冊仝一圓廿錢〇東京市外は一冊に付郵稅五厘宛〇目次

◎社說〇歐洲の文學(其三)トマス、カアライル〇政治家の德義◎小說〇義理の柵(其二)◎雜錄〇懷古(五洲逸人)〇文學者の收入〇銅脈先生〇詩人クーパルと交友〇クロムウエルの死◎論說〇貧民論其三(岐峰生)◎寄書〇女子敎育と英學(井深梶之助)◎新著批評〇皈省〇生命の秘義〇靈魂の不滅を信ずる理由◎時事〇既定歲出〇無謀無策〇勳功議員〇末世の僧侶〇侯爵?伯爵?〇農商務大臣〇渡邊子爵の檄文〇自由の代表者と壓制の代表者〇娼家の撰擧權を剝奪せよ〇集會條例の改正〇三浦中將倫理課を廢す等他數件

發行所

東京市麴町區三番町十番地

日本評論社

●〇脚氣患者諸君よ左の〇●

廣告を讀んで世に名灸有るを知り玉はんことを

●官許專門 天下無比 かつけ根切灸點術●

附言輕症は一二度如何ある重病と雖ども四五度限り全治受合〇灸治効能男女を論せずかつけは勿論腰より下の冷て痛む病に大効ある事受合論より證據實驗あれ〇當時拙家近邊に類似の家號名乘る同業者出來たるに付番地家號篤と御注意の上陸續御來車あれ

京橋區本材木町三丁目二十一番地松屋橋通り

壽福堂

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

第二回夏期學校廣告

夏期學校幾務ハ凡テ東京本郷區森川町一番地木村駿吉宅ニ於テ取扱フヘシ

夏期學校演說ハ其粹ヲ拔キテ一部ノ集トナシ出版スヘシ其出來期限ハ八月中豫約價一部金廿五錢（但遞送料共）豫約望ノ諸君ハ至急東京日本橋區大傳馬町二丁目内田老鶴圃宛ニテ代金ヲ添ヘ姓名幷書籍ヲ屆クヘキ塲所ヲ報セラレヨ

注意——夏期學校演說ハ新聞雜誌ヘ掲載スルヿヲ禁シタレハ今回出版ノ演說集ニ依ラズンハ之ヲ伺フヿ能ハサルヘシ

夏期學校生徒寫眞入用ノ諸君ハ芝區日影町一丁目一番地山本方信伊奈亮正宛ニテ注文セラレヨ大サハ一尺一寸二分ニ一尺四寸位ニテ代價ハ三十五錢其外荷造運送賃合セテ八錢ナリ

會計報告

入金之部

一金七拾二圓　校費
一金六拾七圓五十錢　寄宿料
一金六圓六十五錢　傍聽料
一金貳百圓　スウイフト君寄付
一金百三圓六十錢　明治學院寄付
一金四圓五十五錢　諸寄付

計金四百五十四圓卅錢

出費之部

一金百八十圓八十四錢六厘　寄宿舍費
一金百一圓五十五錢一厘　講師旅費滯在費
一金拾四圓五十一錢　委員奔走費幷諸車代
一金廿九圓　地方招待學生旅費滯在費
一金拾五圓　速記者報酬
一金三圓　筆生報酬
一金三圓五十錢　明治學院小使ヘ心付
一金八圓八錢　諸入足雇賃
一金廿二圓拾三錢　郵便稅電報料
一金拾九圓九十八錢五厘　諸印刷費
一金拾九圓八拾四錢六厘　新聞紙廣告料
一金一圓八十五錢五厘　新聞雜誌代
一金六圓廿三錢　運動會親睦會費
一金拾壹圓四十一錢　消耗品
一金四圓卅八錢壹厘　諸雜費

計金四百四拾壹圓三拾貳錢四厘

差引殘金拾貳圓九拾七錢六厘

右ハ第三回夏期學校資トシテ銀行ニ預ケ置キタリ

右之通相違無之候也

明治廿三年七月廿二日

委員　木村駿吉
同　村上直治郎

明治二十三年八月一日印刷
明治二十三年八月二日出版

發行所　東京麴町區富士見町二丁目一番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留　巖本善治

印刷人　東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留　森田豐

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

第二回夏期學校廣告

夏期學校殘務ハ凡テ東京本郷區森川町一番地木村駿吉宅ニ於テ取扱フヘシ

夏期學校演說ハ其粹ヲ拔キテ一部ノ集トナシ出版スヘシ其出來期限ハ八月中豫約價一部金廿五錢(但遞送料共)豫約望ノ諸君ハ至急東京日本橋區大傳馬町二丁目內田老鶴圃宛ニテ代金ヲ添ヘ姓名幷書籍ヲ屆クヘキ場所ヲ報セラレヨ

注意――夏期學校演說ハ新聞雜誌ヘ掲載スル事ヲ禁シタレハ今回出版ノ演說集ニ依ラズンハ之ヲ伺フ事能ハサルヘシ

夏期學校生徒寫眞入用ノ諸君ハ芝區日影町一丁目一番地山本方信伊奈亮正宛ニテ注文セラレヨ大サハ一尺一寸二分ニ一尺四寸位ニテ代價ハ三十五錢其外荷造運送賃合セテ八錢ナリ

會計報告

入金之部

一金七拾二圓	校費
一金六拾七圓五十錢	寄宿料
一金六圓六十五錢	傍聽料
一金貳百圓	スウイフト君寄付
一金百三圓六十錢	明治學院寄付
一金四圓五十五錢	諸寄付

計金四百五十四圓卅錢

出費之部

一金百八十圓八十四錢六厘	寄宿舍費
一金百一圓五十五錢一厘	講師旅費滯在費
一金拾四圓五十一錢	委員奔走費幷諸車代
一金廿九圓	地方招待學生旅費滯在費
一金拾五圓	速記者報酬
一金三圓	筆生報酬
一金三圓五十錢	明治學院小使ヘ心付
一金八圓八錢	諸人足雇賃
一金廿二圓拾三錢	郵便税電報料
一金拾九圓九十八錢五厘	諸印刷費
一金拾九圓八拾四錢六厘	新聞紙廣告料
一金一圓八十五錢五厘	新聞雜誌代
一金六圓廿三錢	運動會親睦會費
一金拾壹圓四十一錢	消耗品
一金四圓卅八錢壹厘	諸雜費

計金四百四拾壹圓三拾貳錢四厘

差引殘金拾貳圓九拾七錢六厘

右ハ第三回夏期學校資トシテ銀行ニ預ケ置キタリ

右之通相違無之候也

明治廿三年七月廿二日

委員 木村駿吉

同 村上直治郎

明治二十三年八月一日印刷
明治二十三年八月二日出版

東京麴町區富士見町二丁目一番地
發行所 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

遞信省認可

女學雜誌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第二百二十五號目次

社説
細君內助の辨（中）

論説
女子に撰擧權を與ふべし

批評
國會第一期の政治意見○自撰投票論○日本評論の歐洲文學○詩仙を讀む○英文日光案內○ダヒット、リーヴ井ングストン氏の傳○心のかゝみ

雜録
英國上流の貴婦人一日間のくらし方○西行の歌○暑中見舞○日は出でぬ○神を畏るゝといふ事○神童は親の爲に殺さる○芭蕉の句○深夜の星○小松崎古登女を訪ふ

小説
うき世

寄書
女學子に與ふ

時事
政治は海邊の細砂に似たり○高山偉人を生ず○彼岸○漠々○官臭留守居役と傳道職○同もと批評家と爲らん○新政社集會法に對し○魯士亞政府に對し○今の事業○微蟲自から縛す○虎列剌病豫防の心得○米國訓盲院○亞片禁止同盟會○寄宿舍○女散髮師○男女共和國○其他十三件○救濟記事○廢娼記事○通信○週報

—Finds tongues in trees, books in the running brooks, sermons in stones, and good in every thing.—Shakespeare.

婦人政談傍聽論

動かざる山の如く、變はらざる水の如きは、女學雜誌が好みする所ろ也。彼は改良の二字を甚だ嫌忍す、安んぞ改良すと謂はん。但だ第十二卷本號を以て畢るが故に、次號は更に一段改進の初歩とあるべし。

貴婦人の一日行

第二百廿五號

一冊定價六錢

八月九日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY